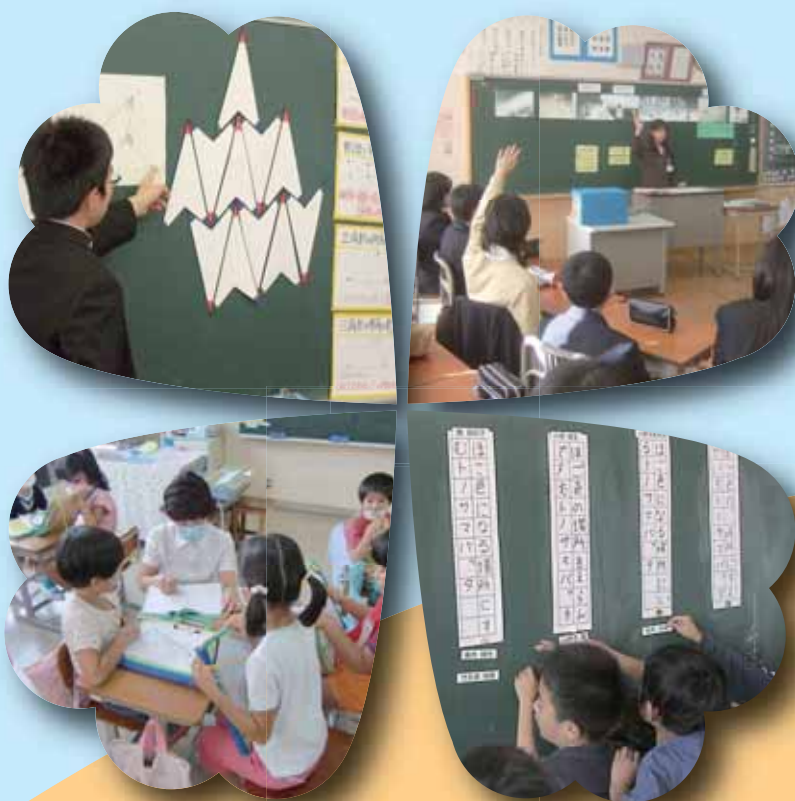


学力向上実践研究推進事業

平成 21 年度 報告書



平成 22 年 3 月

宮城県教育委員会

はじめに

平成18年12月の改正教育基本法の公布、平成19年6月の教育三法の成立、平成20年3月の小・中学校学習指導要領の改訂など、ここ数年、教育界では大改革が進められてきております。

新学習指導要領においては、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことが、ますます重要になるものと指摘されております。他方、国際的な学力調査の結果から、我が国の児童生徒の成果と課題が浮き彫りになったこともあり、一層確かな学力の育成に向けて取り組む必要性についても強調され、各学校段階や各教科等について見直されました。

この「学力向上実践研究推進事業」は、まさしく、児童生徒の学力向上を図る中核的な事業であり、新学習指導要領の趣旨の実現のため、学力向上を図るための方策について実践研究を行うとともに、新学習指導要領の円滑な実施を図る取組に焦点化された事業であります。

本県では、平成20年度から平成22年度までの3年間、学力向上実践研究推進事業推進地区及び推進校に県内4地区、4校（小学校2校、中学校2校）を指定して、本事業を進めております。それぞれの地区や推進校では、地域の実情や課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、「教員の教科指導力の向上」「児童生徒の学習意欲を高める授業づくり」「児童生徒の学習習慣の形成」などについて、創意あふれる充実した取組を行っております。

本報告書は、推進校4校の2年間の研究について、概要と成果等をまとめ、県内の他の学校への普及を図るために作成したものであります。

各市町村教育委員会及び各学校におかれましては、各推進校の取組を参考にし、考え方や実践を学校の状況に合わせて取り入れるなど本報告書を積極的に活用いただき、児童生徒の「確かな学力」の一層の育成を図っていただくようお願いいたします。

最後になりましたが、本県児童生徒の学力向上に向けて、熱心に取り組まれている推進地区の方々及び推進校の先生方に感謝申し上げ、本報告書発刊の挨拶とします。

平成22年3月

宮城県教育庁

義務教育課長 竹田 幸正

目 次

I	学力向上実践研究推進事業趣旨	1
II	事業の内容	1
III	宮城県学力向上実践研究推進事業の概要	2
IV	研究を進めるに当たっての基本的な方向	3
V	本県児童生徒の学力向上を図るために	4
VI	学力向上実践研究推進校報告	5
< I 型	白石市立白石中学校>	5
	(基礎的・基本的な知識・技能の一層の定着を図り, 教科の知識・技能を活用する学習の充実)	
	【研究主題】	
	学ぶ意欲を高め, 確かな学力の向上を図る指導法の工夫	
	一言語活動を重視した活用型学習を通してー	
< II 型	気仙沼市立階上小学校>	19
	(総合的な学習の時間において, 教科等を横断した課題解決的な学習や探求的な学習)	
	【研究主題】	
	伝え合う力を育てる指導の工夫	
	一言語活動を重視した総合的な学習の時間・生活科の指導を通してー	
< III 型	栗原市立宮野小学校>	31
	(新学習指導要領における新しい教育内容に関する指導方法や教材の開発)	
	【研究主題】	
	進んで考え, 共に学び合う児童の育成	
	一国語科における「読む力」を高める指導を通してー	
< I・III 型	仙台市立八乙女中学校>	43
	【研究主題】	
	確かな学力を育成するための指導方法の工夫・改善	
	一基礎・基本と学習習慣の定着, 学習意欲の向上を目指してー	

I 学力向上実践研究推進事業の趣旨

本県の「学校教育の方針と重点」及び児童生徒の実態を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、市町村教育委員会と連携、協力しながら学力向上実践研究推進事業を展開する。

実践研究においては、学習指導の充実及び教員の資質向上に向けた実践研究に取り組むほか、各推進地区及び各推進校における研究成果の普及・共有化を図り、児童生徒の学力向上に資する。

II 事業の内容 【実施期間 平成20年度—平成22年度（3年間）】

1 推進地区及び推進校の指定

(1) 県教育委員会は、各市町村教育委員会からの実施の希望等を踏まえ、以下の市町村教育委員会と小・中学校を、それぞれ推進地区及び推進校として指定する。

I 型 白石市教育委員会，白石市立白石中学校

(基礎的・基本的な知識・技能の一層の定着を図り，教科の知識・技能を活用する学習の充実)

II 型 気仙沼市教育委員会，気仙沼市立階上小学校

(総合的な学習の時間において，教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な学習)

III 型 栗原市教育委員会，栗原市立宮野小学校

(新学習指導要領における新しい教育内容に関する指導方法や教材の開発)

I・III 型 仙台市教育委員会，仙台市立八乙女中学校

(2) 推進校においては、県教育委員会及び当該学校を設置する市町村の教育委員会の指導・助言の下、実践研究を行う。

(3) 研究の推進体制その他の必要な事項については、本実施要項に定めるもののほか、県教育委員会において決定するものとする。

(4) 県教育委員会は、必要に応じ、大学その他の関係機関と連携を図って研究を推進するものとする。

2 学力向上実践研究推進校連絡協議会の設置(宮城県教育庁義務教育課主管)

(1) 宮城県教育委員会は、学力向上実践研究推進校連絡協議会を設置・開催し、推進校に対して必要な指導・助言を行う。

(2) 学力向上実践研究推進校連絡協議会は、学識経験者、当該教育事務所指導主事、当該市町村教育委員会担当者、推進校担当者をもって構成する。

(3) 学力向上実践研究推進校連絡協議会においては、研究成果の発表会や研修会等の開催、実践事例集の作成、インターネットによる情報提供などの取組を促す。

3 地区推進協議会の設置(該各市町村教育委員会主管)

(1) 該各市町村教育委員会は、地区推進協議会を設置・開催し、推進校に対して必要な指導・助言を行うとともに、教員の指導力の向上、研究内容の共有化及び成果等の検証を行う。

(2) 地区推進協議会は、学識経験者、該各市町村教育委員会教育長、推進校教職員、指導主事、県教育委員会指導主事等をもって構成する。

Ⅲ 宮城県学力向上実践研究推進事業の概要

推進校における主な研究内容

白石中学校	階上小学校	宮野小学校	八乙女中学校
<ul style="list-style-type: none"> ○全教科での授業研究の実施など、校内研修の充実 ○言語活動を重視した活用型の授業づくりを進めるための「白中モデル」に基づいた学習課題の設定 ○MAPを導入による「共学び」の場の設定 ○基礎学力向上に向けた取組 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業実践を中心とした手だての有効性の検証 ○学習のねらいを達成するための児童の発言の組織化 ○外部講師を招聘した研修会や講演会の実施 ○学習意欲を高めるための授業づくりの工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びUP研修会」などの教員の教科指導力を高めるため授業研究会の工夫 ○「読む力」の系統性の明確化と授業展開の工夫 ○「読む力」をはぐくむための授業展開モデルの作成 ○「家庭学習カード」の内容や形式の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の学習意欲を高めるための分かる授業づくりの実践 ○学校評価や諸検査による形成的評価の実施 ○生徒の学習意欲を高めるための少人数指導の実施の工夫 ○家庭における学習習慣の形成のための週末課題や振り返りテストの実施

推進地区

白石市教育委員会	気仙沼市教育委員会	栗原市教育委員会	仙台市教育委員会
<ul style="list-style-type: none"> ○地区推進協議会の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・推進校の成果発表 ・学力向上に向けた研修会の実施 ○「学力をはぐくむ」(学力向上啓発資料)の冊子の作成と配布 ○実践報告書の作成と配布 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究指定校連絡協議会の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・推進校の研究内容紹介 ○地区推進協議会の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・推進校の研究成果の発表 ・研修会の実施 ・授業参観 	<ul style="list-style-type: none"> ○「栗原市確かな学力・輝きプラン推進委員会」の設置・開催(推進協議会) <ul style="list-style-type: none"> ・推進校の成果の普及 ・研修会の実施 ・授業参観 ○標準学力調査の実施 ○指定校への指導・支援 	<ul style="list-style-type: none"> ○「学力向上プラン」の策定 <ul style="list-style-type: none"> ・学力向上のためのリーフレットの作成と配布 ・提案授業の公開 ○標準学力検査の実施

推進地域

宮城県教育委員会

- ◆ 推進校連絡協議会の設置・開催(年2回)
 - 委員構成
 - 学識経験者, 当該教育事務所指導主事, 当該市町村教育委員会担当者, 推進校担当者
 - 役割
 - ① 推進地区協議会, 推進校に対する必要な指導・助言に関すること。
 - ② 教員の資質や指導力向上に向けた取組に関すること。
 - ③ 研究成果の発表会や研修会等の開催, 実践事例集の作成, インターネットによる推進校4校の情報提供に関すること。

委嘱

文部科学省

- ◆ 委嘱期間(3年間)
 - 平成20年度～22年度
- ◆ 事業の実施
 - ① 学力向上を図るための方策についての実践研究
 - ② 新学習指導要領の円滑な実施を図るための取組

宮城県の児童生徒の実態

- ◎平成21年度 全国学力・学習状況調査の結果
- 教科に関する調査
 - 20年度と比べ、小・中学校のほとんどの教科で全国の平均正答率が高くなっており(文部科学省見解)、本県も同様の傾向となっている。
 - 本県の小学生の平均正答率は、いずれの教科においても全国平均を下回る結果となっている。国語の「知識」に関するA問題では、全国平均との差異が広がっているが、昨年度まで課題の見られた「活用」に関するB問題については、国語・算数ともに全国平均に近づく結果となっている。
 - 中学生の平均正答率は、国語の「知識」に関するA問題、国語・数学の「活用」に関するB問題については全国平均を上回る結果となっており、数学の「知識」に関するA問題については、全国平均に近づく結果となっている。
 - 児童生徒質問紙調査
 - 20年度までの傾向と同様に、本県の小・中学生は、早ね・早おき・朝ごはんや規則正しく生活することなど、基本的な生活習慣に関する質問に対しては、全国に比べて肯定的な回答をしている項目が多い。
 - 小・中学生とともに、長時間テレビを見たりテレビゲームをしたりする割合は、20年度よりもやや減少しているものの、全国値よりも高い。
 - 平日に家庭で、小学生が30分以上、中学生が1時間以上学習する割合は、小学生は全国値よりも高く20年度よりも増加しており、中学生は全国値よりも低く20年度よりも減少している。

IV 研究を進めるに当たっての基本的な方向

本事業を推進するに当たり、研究の基本的な方向を次の3点とする。

1 教員の教科指導力の向上

児童生徒の学力向上を図るためには、日々の授業において、児童生徒の学習状況を的確に把握し、授業改善に日々努めようとする教師の姿勢が大切であるとともに、一人一人の児童生徒が成就感や満足感の持てる質の高い授業の展開が教師には求められる。

そのような質の高い授業を展開するためには、専門的な知識・技術に裏付けされた教員一人一人の教科指導力が重要であり、教科指導力の向上のためには、校内研修を活性化させるなど、各学校における取組の工夫が必要である。

たとえば、外部講師を招聘して授業研究を行ったり、授業研究会に模擬授業を取り入れたりするなどの工夫が重要である。

2 児童生徒の学習意欲を高める授業づくり

学力向上には、日々の授業において、児童生徒一人一人が成就感や満足感を味わえるようにすることが大切であり、そのためには、以下のような視点から児童生徒の実態を踏まえた個に応じた指導の充実をはじめとした授業改善への取組が不可欠である。

- (1) 授業のねらいを明確に押さえること。
- (2) 児童生徒の意欲や学習能力等、一人一人の実態を的確に把握すること。
- (3) 指導内容を定着させるために、どんな児童生徒にも分かる指導方法の工夫を図ること。
(習熟度別指導、課題別指導等の少人数指導の工夫)
- (4) 指導経過の中で、児童生徒一人一人の習熟度を把握すること。
- (5) 児童生徒一人一人の意見や考えを生かすなど、自主性につなげる工夫を図ること。
- (6) 発問や指示の仕方、板書の仕方、児童生徒の意見の扱い方、褒め方・叱り方、意欲の喚起の仕方等、具体的な指導技術の振り返りが常に行われていること（教師の自己評価・相互評価）

3 児童生徒の学習習慣の形成

学習習慣の形成に向けた取組については、単なる家庭学習の課題の工夫というように矮小化した捉え方ではなく、児童生徒一人一人の学習意欲を高めるとともに、学校、家庭いずれの場においても自ら主体的に学習態度をはぐくむという視点から捉えることが大切であり、その視点を学校と家庭が共有し、緊密な連携を図りながら取組を進めることが重要である。

学習習慣を形成するために、各学校においては、以下の点に留意して進めていく必要がある。

- (1) 全教職員の間で十分な共通理解を図る。
- (2) 学習習慣の形成に向けた指導の基盤づくりを進める。
- (3) 学習習慣の形成を目指した授業改善に努める。
- (4) 家庭との連携強化を図る。

V 本県児童生徒の学力向上に向けて

本事業の推進地区及び推進校の成果と課題に基づき、本県の児童生徒の学力向上を図るために、次の3つの事項に配慮しながら取り組んでいくことが重要である。

1 教員の教科指導力の向上

成果	○市教育委員会と連携した全教科の授業研究の実施により、授業改善に対する教員の意識の高まり ○授業実践を通じた指導の手だての有効性の検証による、教科指導力の向上
課題	○児童生徒の思考をまとめたり、深めたりする学習活動に重点を置いた言語活動の充実を図る指導の一層の工夫

模擬授業や事例研究など実践的な研修の機会が教員の教科指導力の向上に効果的な取組であることから、学校一丸となった全体研修から自主的な研修へと、常に指導改善に向けて動き出しているような機能的な研修体制を整備するとともに、研修の質を高め、一層の指導改善につなげることが大切である。

2 児童生徒の学習意欲を高める授業づくり

成果	○言語活動を重視した授業づくりの実践により、児童生徒の学習への必要感の向上 ○対話を取り入れた学習過程と評価の工夫による学び方の成長
課題	○発達段階に応じて身に付けさせるべき言語活動の明確化と学習課題の設定の工夫 ○「発問」「児童理解」「指名」を子どもの発達段階や状況に応じて適切に行うことができる指導力の向上

児童生徒理解に基づいた授業づくり、指導者の意図的な授業展開、言語活動を重視した学習過程などへの取組は、児童生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむとともに学習意欲の向上に有効であることから、次の点に配慮して指導することが大切である。

- (1) 各教科における授業のねらいに合わせて、1単位時間の中に意図的に「読む」「書く」「話す」活動をバランスよく組み込む工夫をしながら子どもに考えを深めさせ、聞く観点を明確にしたり、さらに聞きたいという思いを膨らませたりするように指導する。
- (2) 小学校低学年からの音読・暗唱、漢字の読み書き等から始め、記録・要約・説明・論述などの活動について、発達段階に応じて意図的・計画的に取り組む。

3 児童生徒の学習習慣の形成

成果	○学校と家庭の連携による家庭学習活性化への取組による、児童生徒の学習習慣の形成とともに学習意欲の向上
課題	○学び直しのできる学習環境の整備 ○接続校や近隣校との連携、地域との連携

小中連携とともに、近隣校等の交流を深め、学力向上への取組を地域に開かれたものにしなから、次の点に配慮して児童生徒の学習習慣の形成に取り組むことが大切である。

- (1) 積極的に外部講師の招聘を図るなど、新たな視点から研修の活性化を目指すとともに、他校との情報交換を深める。必要に応じ、小中合同の授業研究会等を開催し、近隣校教員や、地域住民の参加により、地域で学力向上について話し合う機会を設ける。
- (2) 家庭学習の質の向上と家庭学習の習慣の形成、望ましい生活習慣の育成を図るために、家庭と学校が手を携えて、根気強く取り組む。

VI 学力向上実践研究推進校報告

白石市立白石中学校

学ぶ意欲を高め、確かな学力の向上を図る指導法の工夫 — 言語活動を重視した活用型学習を通して —

1 学校の実態

児童生徒数 356 人 職員数 28 人

	1 年	2 年	3 年	特別支援	合計
生徒数	110	106	134	6	356
学級数	4	3	4	2	13

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

① 今日的課題から

平成 20 年 3 月に告示された新しい学習指導要領では、教育基本法改正等で明確になった教育の理念を継承し、「生きる力」の育成が一層求められている。

「生きる力」を支える三つの力である「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた育成が望まれる。

さらに、確かな学力の要素を①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用した思考力、判断力、表現力の育成、③学習意欲・学習習慣の確立と示している。

これからの求められる学力を身に付けさせるためには、生徒が意欲をもって主体的に習得・活用していくことのできる指導法の工夫が不可欠である。

② 生徒の実態から

これまでの実践から、基礎学力を定着させるためには、個のつまずきに応じたきめ細やかな指導が大切であること、学ぶ意欲を高めるためには、生徒の知的好奇心を揺さぶったり、共に学ぶ楽しさを味わわせたりすることが効果的であることが分かってきた。

しかし、授業を楽しいと考え、真剣に取り組む生徒が増えつつあるものの、進んで自分の考えを発表することに苦手意識を抱えている生徒の実態が明らかになってきた。これは、学習過程で身に付けた知識・技能が自分のものとしてその後の学習に生かされていなかったり、獲得した力を生かす授業の工夫が足りなかった結果と考えられる。

また、全国学力・学習状況調査の結果においても、国語、数学ともに全国平均をやや下回っており、特に「活用」に関する問題に課題がみられた。

このような生徒の実態から、習得した力を基に、「課題に対して積極的にかかわらせる」「考えたことをお互いに表現し合い、練り合う」といった活動を通して、活用する力に結び付けていくために言語活動を重視した指導を工夫しようと考えた。

③ 教育目標の具現から

本校では、教育目標と目指す生徒像を次の通り設定している。

〈教育目標〉：21 世紀を担う子どもたちの教育を見据え、人間尊重の精神に立って生徒の豊かな人間性の育成を目指し、生涯学習の基礎的な資質の向上に努める。

〈めざす生徒像〉

不撓不屈：夢をふくらませ、その実現に向かって努力する生徒

友 愛：思いやりと奉仕の精神で、生活を豊かにする生徒

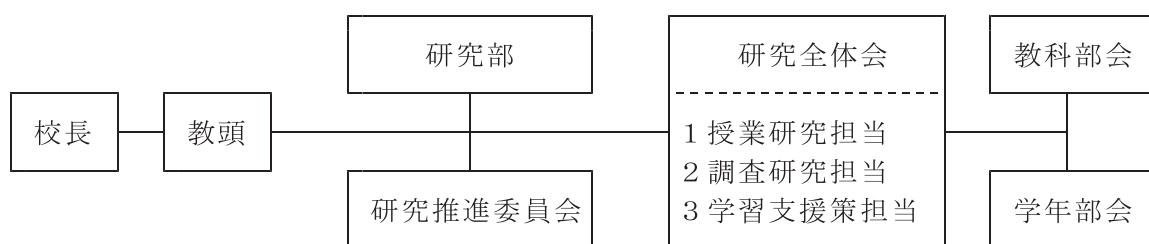
自 主：主体的に判断・行動し、問題を解決する生徒

生涯学習の基礎的な資質の向上に努め、「主体的に判断・行動し問題を解決する生徒」を具現化していくためには、「①習得した力を基に、課題に対して積極的にかかわらせる。」
「②考えたことをお互いに表現し合い、練り合う。」といった活動を通して、活用する力を身に付けさせ、学力の向上を図ることを目指したいと考えた。

(2) 研究目標

習得した力を活用する力に結び付けるため、言語活動を重視した活用型学習の指導計画作成とその実践を通して、学ぶ意欲を高め、確かな学力の向上を図る指導方法の在り方を探る。

(3) 研究組織



(4) 研究内容

各教科の指導において、次の視点から、生徒の学ぶ意欲を高め、確かな学力を向上させる指導方法を明らかにしていく。

① 教員の指導力の向上

校内研修の充実を図ることで、指導力の向上を目指すとともに、全教科において授業研究を実施する。

② 生徒の学習意欲を高める授業づくり

習得した力を活用する力に結び付けるために、「白石モデル」に基づいた単元（題材）を貫く学習課題を設定し、生活とのかかわりを意識しながら言語活動を重視した活用型の授業づくりを進める。

また、学ぶ意欲を高める学習環境をつくるためにMAPの手法を取り入れ、人間関係形成能力の育成を図る。さらに、授業の中で「共学び」の場を設けるなどして、生徒同士の教え合いや意見交換を重視する。

③ 生徒の学習習慣の形成

活用する力の土台をより確かなものにするためや望ましい学習習慣を身に付けさせるために、学年の実態に応じた基礎学力向上への取組を工夫する。

(5) 研究方法

① 言語活動を重視した活用型学習「白中モデル」の授業研究を進める。

ア 単元（題材）の指導計画に「基礎・基本の習得」「活用」の学習活動を位置付け、教科の目標や特性に応じた「活用」の視点を探る。

イ 教科の特性を踏まえ学ぶ意欲を高める場面設定や共学びの場の在り方を探る。

ウ 教科の特性を踏まえ言語活動のとらえを明らかにし、単元や題材の指導に生かす。

② 生徒や保護者の学習に関する意識調査（実態調査）を定期的実施し、生徒の変容を把握する。

③ 全国学力・学習状況調査の結果や「観点別学習状況」「評定」到達度診断（CRT）テストによる生徒の学びを把握し、教科指導や家庭学習等の改善策につなげる。

④ 文献研究や講師招聘、先進校の視察等により、先行事例の研修を行う。

⑤ 基礎的・基本的な知識・技能の習得を徹底するため、新学習指導要領が示す重点指導事項等を確認し、スムーズな移行ができる指導計画を教科ごとに作成・実施する。

⑥ 共同研究主題をもとに、各部会等でテーマを設定し研究を進め、教科間の連携を密にして、指導方法の工夫を生かし合う。

(6) 研究の計画及び構想

<第1年次> 平成20年度

組織作りと基礎研究

全教科における授業づくりを通して

- ① 実態調査（生徒を対象に4月・12月）
- ② 各教科ごとに年間指導計画等の見直し（研究課題との関連性を重視して）
- ③ 言語活動を重視した活用型学習の授業研究の推進
- ④ 校内研究，研修の充実
- ⑤ 学習支援策や支援体制の見直し等
- ⑥ キャリア教育への積極的な取組（11月公開授業研究会 授業提供校）
- ⑦ その他 文献研究
- ⑧ 宮城県学力向上実践研究推進事業連絡協議会への参加

<第2年次> 平成21年度

初年度の基礎研究の実践・深化
活用型学習の授業づくりと学習支援策の工夫を通して

- ① 実態調査（生徒を対象に4月・12月・保護者5月・12月）
- ②～⑤の継続研究及び実践・深化
- ⑥ キャリア教育への積極的な取組，体験的学習活動とガイダンスの充実（白石中版 「学習と進路の手引き」の有効活用など）
- ⑦ 自主公開研究会開催（11月 中間発表）
- ⑧ 指定校訪問を生かした授業研究会の開催（年3回）
- ⑨ 宮城県学力向上実践研究推進事業連絡協議会への参加

<第3年次> 平成22年度

基礎研究や実践の深化・発展
全教科における活用型学習の授業づくりと学習支援策の工夫を取り入れた白石モデルの提案

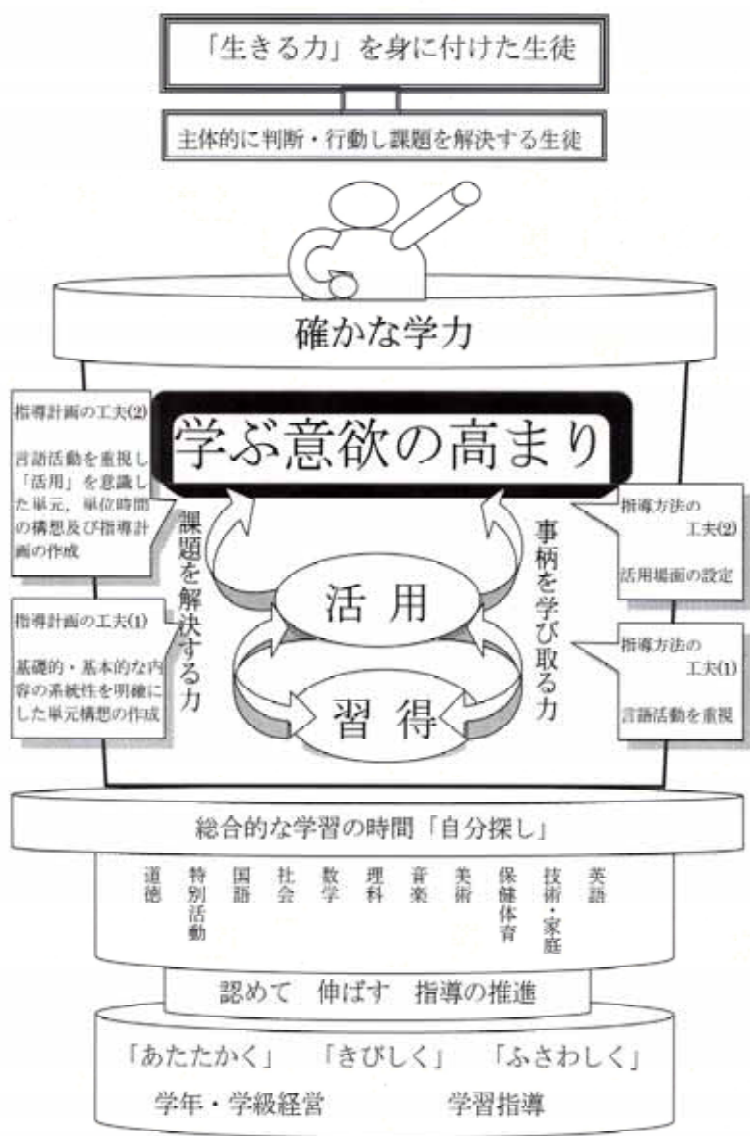
- ① 実態調査（生徒を対象に4月・10月・保護者4月・10月）
- ②～⑤の継続研究及び実践・深化
- ⑥ キャリア教育への積極的な取組，体験的学習活動とガイダンス機能の推進（白石中版 「学習と進路の手引き」の有効活用）
- ⑦ 最終事業報告（11月 公開研究会の開催）
- ⑧ 指定校訪問を生かした授業研究会の開催（年2回）
- ⑨ 宮城県学力向上実践研究推進事業連絡協議会への参加

【平成21年度 研究推進計画】

月	項 目	内 容
4月	・研究推進委員会 ・職員会議（研究全体会①） ・各部会	・本年度の「年間研究計画」の確認 ・「年間研究計画」の決定 ・共同研究主題に係る年間指導計画の計画および立案
5月	・職員会議（研究全体会②） ・実態調査 ・研究推進全体会	・各部会等における研究計画と具体的内容の報告・提示 ・研究実践にかかわる生徒の実態調査及び分析
6月	・各部会 ・授業研究会① ・職員会議（研究全体会③）	・研究授業（提案授業） ・指導主事訪問に向けての教材研究・指導案検討
7月	・各部会 ・指導主事訪問 A 訪問 ・研究推進委員会 ・職員会議（研究全体会④）	・「実践」の検証（成果と今後の課題）と集約の継続 ・研究内容の中間報告と研究計画の再検討① ・研究授業<指導主事訪問> ・平成21年度第1回連絡協議会 中間発表
8月	・職員会議（研究全体会⑤） ・研究推進委員会	・指定校訪問に向けて ・現職教育研修会
9月	・授業研究会② ・教育事務所指定校訪問 ・研究全体会 ・各部会 ・職員会議（研究全体会⑥）	・研究授業（提案授業） ・研究計画に沿った実践と集約 ・校内研修会（授業検討会） <授業力向上および研究の進め方について>

10月	<ul style="list-style-type: none"> 研究推進全体会 職員会議（研究全体会⑦） 各部会 	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容の中間報告と研究計画の再検討② 今日的課題の確認 ・先進校視察 教科の公開研究授業に向けての準備
11月	<ul style="list-style-type: none"> 各部会 授業研究会③ （中間発表会） 職員会議（研究全体会⑧） 	<ul style="list-style-type: none"> 公開研究授業（各教科授業提供） 公開授業検討会による研究に対する意見収集 「実践」と検証（評価とまとめ）の集約
12月	<ul style="list-style-type: none"> 職員会議（研究全体会⑨） 各部会 	<ul style="list-style-type: none"> 研究実践に係る「評価とまとめ」の原稿作成について 研究実践にかかわる生徒の実態調査及び分析
1月	<ul style="list-style-type: none"> 研究推進委員会 職員会議（研究全体会⑩） 各部会 	<ul style="list-style-type: none"> 研究実践に係る「評価とまとめ」の原稿提出について 本年度の反省と「今後の課題」への対応・方策の検討
2月	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究会④ 教育事務所指定校訪問 研究全体会 研究推進委員会 各部会 職員会議（研究全体会⑪） 	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修会（授業検討会） <本年度の研究結果発表> <次年度の研究計画に向けての協議> 次年度の「校内研究と推進」計画について 次年度の各教科等の「研究内容」計画の立案・作成報告 第2回連絡協議会 研究成果発表 次年度の計画発表
3月	<ul style="list-style-type: none"> 職員会議（研究全体会⑫） 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度の「校内研究」計画の提示

【研究の構想】



本校の指導の基本姿勢「あたたかく」「きびしく」「ふさわしく」を土台に、生徒が各教科の学習の中で知識・技能、見方や考え方を習得し、それを活用しながら事柄を学び取る力や課題を解決する力を身に付けることで学習意欲が高まり、確かな学力がはぐくまれ、主体的に判断・行動し課題を解決できる生徒の育成につながると考えた。

そこで、言語活動を重視したり、活用場面を設定したりする指導法の工夫が求められるとともに、基礎的・基本的な内容の系統性、すなわち既習事項とのつながりをはじめとして単元や題材でどのような「活用」を取り入れていくのかを明確にした単元構想や指導計画の工夫が必要と考え、立案した。

(7) 研究主題のとらえについて

① 「学ぶ意欲を高める」とは

学ぶ意欲を高めることを、教師が生徒の学習意欲を引き出すという意味と押さえた。

生徒の学習意欲を引き出すためには、生徒の学ぶ意欲が高まる場面に着目して、教科ごとに教科の特性を踏まえながら、手立てを工夫していく。その三つの場面を「1. 課題との出会い（疑問が生まれたとき）2. 課題を追究している場面（どんな結果か、早く知りたい）3. 課題を解決したとき（さらに深く知りたい）」と考える。

② 「確かな学力」とは

平成15年10月の中央教育審議会答申では、「確かな学力」を知識・技能に加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものであり、生涯にわたって主体的に学び続ける力の基礎であると位置付けている。

また、「確かな学力」を育てる上で、ア-知識や技能と思考力、判断力、表現力や学ぶ意欲などをバランスよく高めていくこと、イ-知識や技能と生活の結び付きや、知識や技能と思考力・判断力・表現力の相互の関連付けや深化・総合化を図ること、ウ-子どもたちの学習意欲を高めること、などを重視している。

本校の研究主題「確かな学力」は、確かな学力の要素である「学ぶ意欲、知識・技能、思考力、判断力、表現力、問題解決能力、学び方、課題発見能力」ととらえた。

③ 「言語活動を重視した活用型学習」とは

確かな学力を育成するためには、既存の知識・技能を身に付ける「習得型の学習」と身に付けた知識・技能を活用し自分のテーマを探究する「活用・探究型の学習」をバランスよく結び付けていくことが重要とされている。

本校でもこの2つの学習スタイルの有効性を踏まえて、習得した力を活用する力に結び付ける指導を工夫しようと考えた。その際、よりよく課題を追究させるために、「言語活動」を学習を進めるための意欲付けであったり、思考力、判断力、表現力を高めるためのツールと考え、指導を展開することにした。

したがって、言語活動を各教科の授業で効果的に取り入れるためにも、国語科における言語活動を目的的・計画的・意図的・体系的・系統的に行うものと考え、他教科における言語活動を手段的・応用的・必然的に行う実際の場合と考えた。つまり、国語科で培った言語活動の能力を活用・応用させ、各教科等のねらいを効果的に達成するとともに、思考力、判断力、表現力をはぐくむことにつながると考えた。

このような考えに基づき、単元（題材）の指導計画において、意図的に「基礎・基本の習得」「活用」の学習活動を組み込み、言語活動の充実を図りながら、「生活で生きてはたらく力」を身に付けさせる視点を取り入れた授業実践を活用型学習「白中モデル」と押さえ、設定した。

また、「活用」については、PISA 型読解力の低下と全国学力・学習状況調査における B 問題を解く力の不足から、学校教育の在り方に対して改善が求められ、今回の学習指導要領改訂の基調ともなっている。

そこで、まず本校では、「基礎・基本」を「① 教科で最低限身に付けたい基礎的・基本的な知識・技能」「② 教科で課題を解決するために必要な考え方、思考の道筋」「③ 教科の学習に必要な学習姿勢」ととらえた。さらに「活用」を、各教科のねらいを達成するために、習得した基礎的・基本的な知識・技能などを用いて課題を解決したり、新しい事柄を学び取ったりする学習ととらえた。

特に、本校の学習に取り入れたい言語活動を以下のように設定した。

- | | |
|-------------|-------------------|
| ア) 資料を読み取る | イ) 課題を多方面から見て解決する |
| ウ) 鑑賞する | エ) 比較する |
| オ) 関連付けて考える | カ) 話し合う |
| キ) 資料を作る | ク) 説明する |
| ケ) 発表する | コ) 学習活動を振り返る |

(8) 研究の経過

① 教科における「活用型学習のデザイン」について

昨年度の「言語活動を重視した単元開発や共学びの場の設定，生徒の実態に応じた学習支援体制」等の基礎研究や実践を生かし，全教科において「言語活動を重視した活用型学習」の学習計画とその指導法について研究実践を推進するに当たり，「活用型学習のデザイン（図 1）」を考えた。図 1 に示した方向性に基づいて，教科ごとに活用型学習の在り方を「学習課題」，「基礎・基本」，「言語活動」，

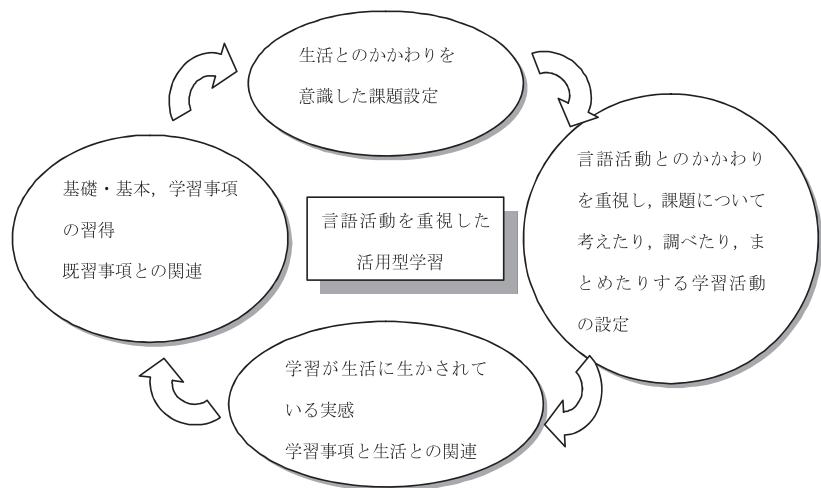


図 1 言語活動を重視した活用型学習の考え方

「活用の場面，身に付けさせたい能力や態度」「実践から得た，よりよい授業づくりのための視点」に基づいて授業を見直した事例を以下に示す。

【理科の事例】

学習課題	「透明な物体に当たった光の進む道筋を調べよう」
基礎・基本	光はまっすぐ進む。光が物体に当たると反射する。反射の法則。 ものが見えるのは，反射した光が目に入るから。
言語活動	カ) 関連付けて考える
活用の場面	実験結果を基に，きまりを見つけることができる。
身に付けさせたい能力や態度	身近な例と関連付けて，日常生活で光の性質が利用されていることに気付く。
実践から得た，よりよい授業づくりのための視点	言語活動について，理科の用語を使って説明できるようにするなど学習プリントの作り方を工夫する。

これらの授業研究や実践を重ねていく中で，教科ごとに単元や題材のベースとなる「基礎・基本」を洗い出し，重視する言語活動を「学習ツール」として考え，身に付けさせたい態度や能力を明確化した活用場面の設定を行うことにより，「学んだことを生かす授業づくり」すなわち，「活用型学習」が展開しやすいことが分かってきた。そこで，図 2 に示したように，「基礎・基本」，「学習に取り入れたい言語活動」，「活用場面の設定」を活用型学習「白石モデルの 3 要素」とし，より具体的に実現可能な単元・題材の学習活動を探っていくこととした。

活用型学習 白石モデルの 3 要素

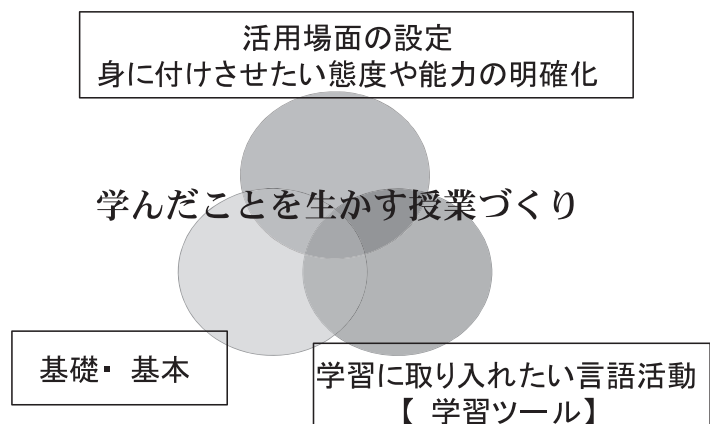


図 2 活用型学習のモデル「白石モデルの 3 要素」

② 教科における「活用型学習」の単元・題材の単元構想図及び指導計画の作成について
 言語活動を重視した活用型学習を各教科で具現化していくために、言語活動を一つの指導の手立てや方法とし、「習得→活用」という学習過程の工夫や共学びといった学習形態の工夫とリンクさせ、各教科等のねらいに基づいた授業づくりを進めている。

本研究に取り組む中で、活用型学習には大きく3つの構成の仕方があると考え、「白石モデル 3つの型」として図3に示した。

一つ目は「活用型単元」である。単元の学習内容を効率よく学習した後に、時間を設定し、「活用する活動」を中心として構成する単元である。

この場合の活用は、単元A、単元Bで学習したことに限定したのではなく、すべての既習事項を活用できるものと押さえた。

二つ目は、「習得中心の学習」と「活用する学習」で構成する「習得・活用型単元」である。

単元の前半で習得した知識・技能を、単元の後半で活用し、思考力・判断力・表現力などや課題解決能力を高める学習が可能であり、単元の途中に設定する場合も考えられる。

三つ目は、課題を個人や集団で追究・整理するなどの学習を通して、習得や活用を単元の様々な場面に配置する「課題解決型単元」である。

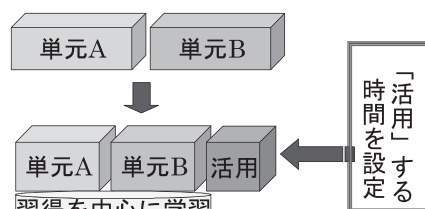
そこで、授業において言語活動や活用型学習をどのような学習活動で具現化していくのかを明記した単元（題材）の構想図や指導計画を作成する必要性が実践から分かってきた。

したがって、指導計画作成時に再度教科のねらいを確認し、学習題材を通して生徒が身に付ける知識・理解、見方や考え方を「目標とする力」として設定することとした。これにより、授業づくりの視点が明確になり一単位時間、および各学習題材相互のつながりを明らかにした上で指導を進めることができ、生徒がより学びを実感できると考えた。

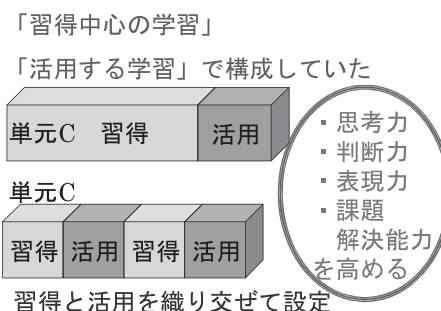
以上のことから、より一層教科のねらいを明確にし、「習得→活用」をはじめとした活用型学習を展開していくためも、単元（題材）ごとに、「基礎・基本」「言語活動」「目標とする力（身に付けさせたい態度や能力）」に視点をおいた単元（題材）の指導計画（表1）や構想図（図4）を作成している。

白石モデル 3つの型

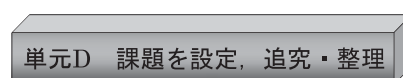
I 「活用型単元」



II 習得・活用型単元



III 課題解決型単元



習得や活用場が単元の様々な場面に配置
 総合的な学習の時間等で展開しやすい

図3 白石モデル 3つの型

表1 単元（題材）の指導計画項目 音楽科作成例

時数	時間	目標とする力	学習題材	教科で重視する言語活動					評価の観点
				ウ 鑑賞	オ 比較	カ 関連	ク 話し 合う	ス 発表 する	
2	1.5	・曲の仕組みを理解して、歌唱表現を工夫する能力。	♪教材 ・曲の仕組みを生かして表現を工夫しよう ♪「心の中に きらめいて」				○	◎	【技能】 曲の仕組みや特徴を理解できたか。

単元構想図 「〇〇単元名が入る〇〇」(全□□時間)

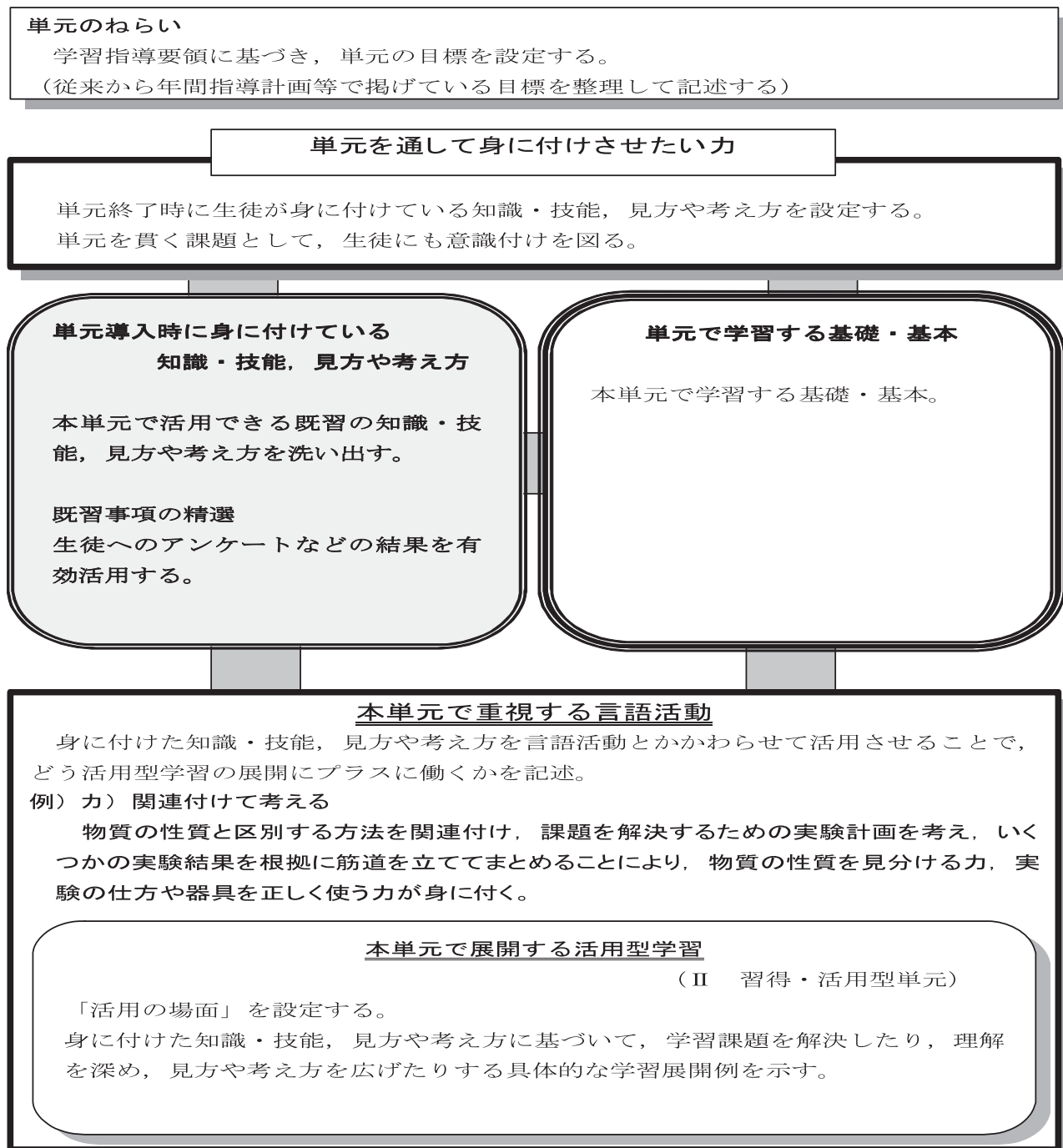


図4 単元の構想図例

(9) 実践事例

① 実践事例1 教員の指導力の向上

・中間発表会の開催

3年間の研究指定を折り返すにあたり、これまでの研究実践を白石市教育研究会の研修会の一環として、白石市内全小・中学校教職員に発表した。また、大河原教育事務所管内各小・中学校からも、多くの参加をいただくことができた。

発表会当日は、8教科の公開授業を実施した。その後、3分科会ごとに研究概要説明を行った上で、授業検討会を中心とした研究協議を進めた。



図5 公開授業 理科

参加者からは、「言語活動を授業に取り入れる際の基本的な考え方が理解できた」や「授業における活用の在り方が曖昧と感じた」など研究内容に関する意見が多く出され、今後の研究推進に向けて大いに刺激となった。この中間発表会を機会に、これまでの各教科における研究の取組をまとめ、再度研究の方向性を考えることにつながった。

② 実践事例2 教員の指導力の向上

・ 校内研修会の充実

今年度から研究組織を見直し、授業研究担当，調査研究担当，学習支援策担当を置き，全職員がいずれかに所属するようにした。各担当で研究に関わる具体的な活動を練り，進めることができた。

特に授業研究部では，授業研究の際に課題をもって取り組めるよう「授業観察カード」を新たに作成した。これは，本時の指導過程を左側に記載し，右側には授業者が考えたり，重視したりした言語活動や活用型学習の視点を記載したものである。これにより，授業を観察する際の視点を共通化することができ，事後検討会の活性化につながることができた。

また，今年度は研究視察として，東京都，岐阜県，愛知県，岩手県の計5校を学校訪問し，情報交換を行ってきた。その都度，視察報告を職員会議内に設定し，伝達を行うことで共通理解を図ることができた。

③ 実践事例3 生徒の学習意欲を高める授業づくり

・ 授業研究会の実施

7月，9月，10月，11月，2月の計5回授業研究を実施した。回を重ねるごとに，研究内容に対する理解が深まったり，よりよい研究を進めるためには，教科でどう進めるべきかなど意見を出し合ったりすることにつながった。また，職員間において，授業研究の時だけでなく，空き時間などに互いに授業参観を行うなど指導方法の改善に前向きな雰囲気が出てきている。

以下は，全職員が参加した授業研究会のまとめを抜粋したものである。

研究指定校指導主事訪問 I

9月15日（火） 授業者 丹野 幸法教諭 3年4組
教科 社会科 題材「現代の民主政治」

白石市の広報誌を取り上げ，自分たちが暮らしている白石市の現状を読み取りながら，実際の社会の中で積極的に政治に参加していこうとする姿勢が大切であることに気付かせる授業であった。

生徒は，広報誌から社会的事象を読み取り，関連付けて考える場面を通して，自分の考えをもち，まとめることができていた。

また，思考の流れが深まる授業の展開であり，教科で重視する言語活動「関連付けて考える」が効果的に仕組まれていた。

言語活動を重視した活用型学習のモデルになる授業であった。



図6 「広報 しらいし」を題材にした社会科の研究授業

④ 実践事例4 生徒の学習習慣の形成

・ 学習支援体制の充実

ア) 高校生ボランティアによる学習会の開催（全学年）

現役高校生を講師に，数学を中心に学習会を企画し，参加を募った。当日は70名を超える生徒が参加し，学習会の他にも，高校生活についての話を聞く時間を設定し，学習する意義や必要性を実感させ，漠然としている上級学校について理解を深めることができた。（図7）



図7 高校生ボランティアによる学習会

イ) 基礎学習の実施 (全学年)

7月と12月に学習強化期間を設け、各学年の実態に応じた基礎学力や応用力の向上のための補充学習を全校一斉に実施した。

期間は、月・金曜日の5校時終了後で、各学年の実態に応じた教科・内容とし、時間は25分間で実施した。

ウ) 週末課題の実施 (全学年)

教科担任が中心となり、学年と連携しながら金曜日に副教材として購入しているワークブックや自作のプリントを週末課題として提示し、月曜日に回収している。回収した課題は、教科担当が点検し、生徒に返却した。また、提出しなかったり、理解が不十分だったりしている生徒には、個別指導を行った。家庭学習を習慣付けていく手立ての一つとして、生徒に定着している。

エ) 夏休み朝の学習会の実施 (3学年)

夏休みの生活のリズムを整えたり、受験勉強のやり方を覚えたりする目的で実施し、約100名の生徒が参加した。

オ) 形成的テスト等の実施 (全学年)

本校独自の「学習と進路の手引き」を中心としたガイダンスや2学期制の利点を生かし、全学年で学習強化期間を設定している。特に「基礎学習の時間」として、各学年の実態に応じた基礎学力や応用力の向上のための補充学習を全校一斉に実施するなど、生徒の学習習慣の形成に大きな効果を上げている。

これまで6月に1学期の中間考査を実施してきたが、期末考査を夏休み明けすぐに実施することにしたため、試験範囲との兼ね合いから中間考査に代えて、これまでの学習をどれくらい理解し、定着しているのかを確認する「形成的テスト」を実施することにした。具体的には、30分のテスト後、自己採点を行う方法で、生徒が自分の理解度をチェックする形で行った。問題を作成する教員は、模範解答にどこをどのように復習すればよいかをアドバイスする欄を設けるなど工夫を凝らしていた。

しかし、生徒の中には、「形成的テストは自己採点なので、定期考査とは違っているのに、中間考査のほうが勉強をする気になる」といった感想も聞かれた。



図8 形成的テストに取り組む生徒

⑤ 実践事例5 生徒の実態把握

生徒の学習に関する意識調査を質問紙法で、平成21年4月、12月に全校生徒を対象に実施している。その結果、全体として各教科の授業に興味をもって取り組んでいる傾向にあることが明らかとなった。

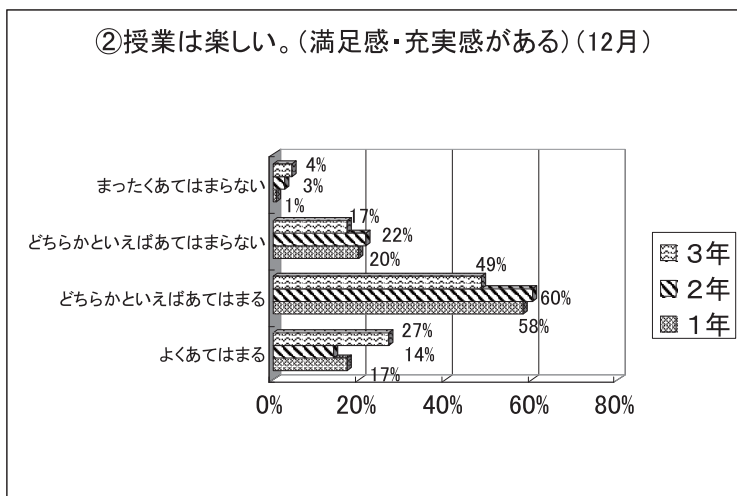


図9 生徒の授業への取組についての自己評価

また、教員全員に対しても、同様の質問項目で調査を実施したところ、集計結果全般から、教師は生徒の学習に対する姿勢をおおむね満足できると評価していることがうかがえた。

12月の意識調査では、「どんなときに、やる気が出て意欲的に授業に取り組む気持ちになるか」という質問項目において、1年生では、学習事項ができなかったり、理解不十分なことが

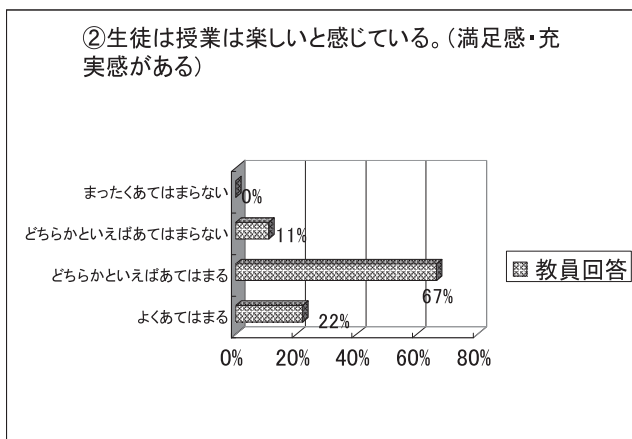


図10 教師の授業への取組についての自己評価

3 研究成果

(1) 実態調査に基づいた生徒の変容について

各教科で展開している言語活動を重視した授業づくりにより、生徒の学習への取組がどう変容したかを調査する目的で、平成21年4月、12月の2回にわたり全校生徒を対象に実施した。

3年生では、得意と回答した生徒が増え、苦手と回答した生徒の割合も減少してきている。資料を読み取り、比較したり関連付け、課題を解決したりする学習活動の展開がプラスに働いていることがわかる。(図 11)

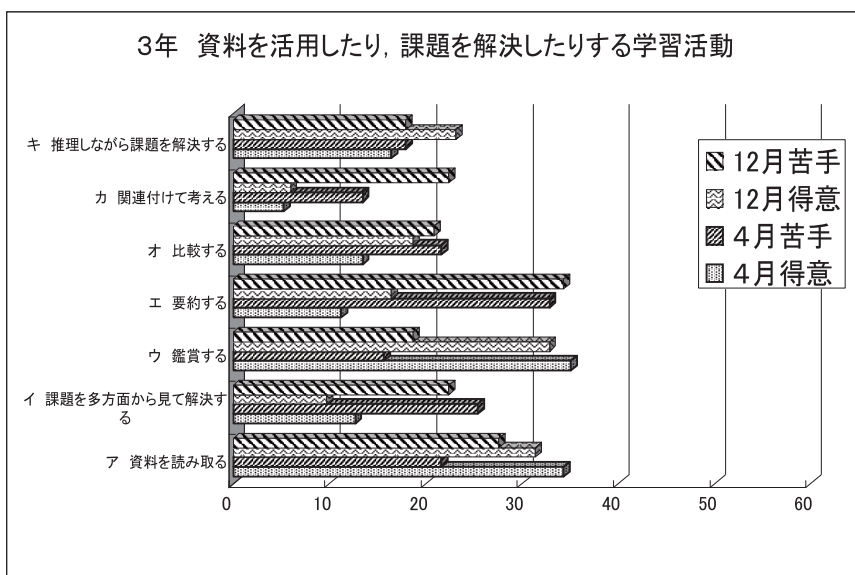


図11 3年生 言語活動を重視した学習活動への取組を自己評価

2年生では、他学年に比べ、「説明する」「発表する」学習活動への苦手意識が強いことが明らかとなった。一人一人が考えをもち、話し合い活動に臨む姿勢が身に付いていることから、間違いなどを恐れず発言や発表を促す受容的な雰囲気醸成することも一つの方法と考え、実践していく必要がある。

1年生では、学習活動における話し合い活動などを好み、積極的に取り組んでいる姿が回答からうかがえる。これらの点を評価しつつ、一人一人

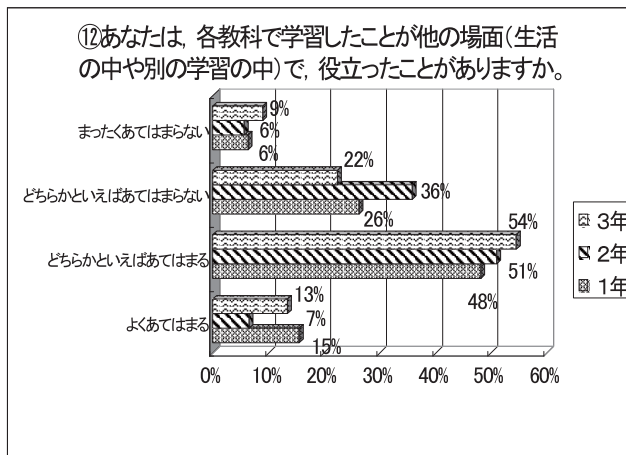
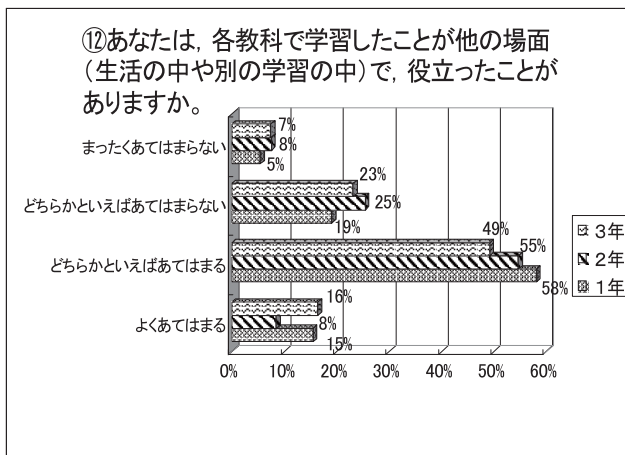


図12 学習内容と生活とのかかわりについての生徒の意識 (左図：4月，右図：12月)

の思考をまとめたり、深めたりする活動に力を入れていくことが今後の課題である。

また、図 12 に示した「あなたは、各教科で学習したことが他の場面（生活の中や別の学習の中）で、役立ったことがありますか」という設問に対して、各学年とも、約半数の生徒がプラスの回答であった。学習内容と生活とのかかわりを意識した活用型学習を展開してきたことで、生徒が学習の必要性を実感することにつながり、学習へ取り組む姿勢が前向きになっていると考えられる。より一層の学習意欲や基礎・基本の定着を図りたい。

(2) 平成21年度標準学力検査（数研式CRT）の結果について

標準学力検査（数研式CRT）については、全国との比較を行うことができ、学年・学級平均、個人とそれぞれの問題によって結果が出ることから、弱点部分を把握し、定着内容を確認することにより、指導の改善に生かすために実施した。各教科の学年全体の「得点率」を見ると、全国平均を下回っている結果となったが、2年生女子や3年生男子では教科によっては上回った教科も見られた。詳しい数値は、表3に示す。

2年生では、国語の「書くこと」「読むこと」、数学の「数量関係」英語の「聞くこと」が、3年生では、数学の「数量関係」が全国平均よりも得点が高い結果であった。さらに、他教科の領域別では、全国平均を若干下回ったものの、ほぼすべての領域が全国比 90 % 以上という結果であった。

生徒たちに「授業の約束7ヶ条」を示し、各教科共通で学習についての心構えを大切にして取り組ませてきたり、補充学習や週末課題を通して、学習事項の理解度や学習方法を確認したりしてきた成果が表れている。このようなことから、学習規律や学習習慣が身に付いていることが、生徒の学力を向上させる最大のベースであると考えられる。

したがって、全職員が共通理解の基で、学習指導や生徒指導に当たることが、本校における研究の大きな柱ととらえ、これからも、教員一人一人が、この意識を大切にして、授業や諸活動に取り組んでいかなければならないことが確認できた。

教科	平成21年度 2年生			平成21年度 3年生		
	得点率	学年全体	全国	得点率	学年全体	全国
国語	男子 60.5	67.8	68.5	男子 69.0	70.4	74.5
	女子 75.1			女子 71.8		
社会	男子 52.9	56.9	60.1	男子 61.8	57.9	62.5
	女子 60.9			女子 53.6		
数学	男子 53.9	56.2	58.3	男子 58.6	57.1	57.4
	女子 58.5			女子 55.3		
理科	男子 54.4	57.5	61.4	男子 65.7	63.6	67.8
	女子 60.6			女子 60.6		
英語	男子 62.6	68.2	70.5	男子 65.6	63.6	66.6
	女子 73.7			女子 61.4		

表3 平成21年度標準学力検査（数研式CRT）の結果H21.4.27実施

4 今後の課題と改善策

(1) 今年度の研究の経過

研究の経過において見えてきた課題は3点である。

1点目は、「教師主導」の授業から、子どもの主体的な学びのある授業づくりを目指し、教師の教科指導力を向上させることである。

2点目は、「言語活動を重視した授業」について理解することである。言語活動を重視するとは、言語活動を生徒に身に付けさせたい思考力、判断力、表現力を高めるためのツールとして、単元の指導計画に位置付けたり、意識的に授業に取り入れたりして、指導を展開することである。言語活動そのものが、授業の目的ではないことを共通理解し、授業づくりに取り組むことを追究していく必要がある。

3点目は、本校の活用型学習のモデル「白石モデル」に基づいて、実践可能な単元・題材の学習活動を探っていくことである。教科ごとに単元や題材のベースとなる「基礎・基本」を洗い出し、重視する言語活動を「学習ツール」として考え、身に付けさせたい態度や能力を明確化した活用場面の設定を行うことにより、「活用型学習」の展開に一層努めていきたい。このことは、教材研究能力や授業指導力が高まる授業づくりにもつながるものである。

さらに、言語活動を重視した活用型学習を展開するために、単元（題材）ごとに、「基礎・

基本」，「言語活動」，「目標とする力（身に付けさせたい態度や能力）」に視点をおいた指導計画や単元構想図の作成を進めている。

(2) 次年度の課題

- ① 各教科のねらいを達成するために，言語活動を重視した活用型の授業づくりを進める上で，「習得」「活用」の場面設定や授業構成を探ることが必要である。そのためにも，各教科における「活用」の在り方をとらえ直すとともに，言語活動を重視し，基礎・基本をより一層定着させるための題材や単元の洗い出しを進めていくことが課題である。
- ② 発表したり，説明したりする学習活動を苦手と考えている生徒が半数以上いることから，各教科において，どのような工夫や手立てを講じることが有効なのかを探っていく。
また，得意と回答する生徒が少ないことから，生徒の学習成果を認め，自信をもたせるよう工夫し，さらに意欲的に学習を進めていくための指導法について，研究していくことが課題である。

(3) 改善策について

- ① 次のことに留意した言語活動を重視した活用型学習の実践
 - ア) 各教科における単元，単位時間のねらいを明確にする。
 - イ) 各教科における単元や学習過程で基礎・基本を活用に結び付けるための言語活動を洗い出す。
 - ウ) 単元構想図を作成する。
 - エ) 活用型学習での言語活動の位置付け，言語活動を行うねらいを明確にする。
- ② 各教科における年間指導計画の作成
新学習指導要領に基づいた教材研究や題材の検討は進んできている。実践を生かしながら言語活動を重視した年間指導計画の作成に取り組む。
- ③ 基礎学力向上に向けた取組の充実
各教科で「授業の約束7ヶ条」を中心に据えた授業規律の定着を目指す。また，基礎学習，週末課題等の補充学習や家庭学習における取組方法へのアドバイスを積極的に進める。
- ④ 実態調査の継続と分析
学ぶ意欲を高め，学力の向上を図るための指導の改善点を明らかにする。

主な参考文献

- | | | | |
|-------|---|------------|-------------|
| [1] | 中央教育審議会：「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 | 文部科学省 | 2008 |
| [2] | 文部科学省：「中学校学習指導要領」 | 文部科学省 | 2008 |
| [3] | 文部科学省：「中学校学習指導要領解説 総則編」 | 文部科学省 | 2008 |
| [4] | 吉田裕久：「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の在り方」 | 初等教育資料 8月号 | 東洋館出版社 2009 |

気仙沼市立階上小学校

伝え合う力を育てる指導の工夫

一言語活動を重視した総合的な学習の時間・生活科の指導を通して

1 学校の実態

児童数 256人 職員数 18名 (平成21年4月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特支	合計
児童数	40	49	32	39	41	50	5	256
学級数	2	2	1	1	2	2	2	12

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

① 今日的な課題から

国際化が進むこれからの知識基盤社会の中での学力は、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得し、それを活用して教科の内容を正しく理解することだけでは十分とは言えない。これらの知識・技能を役立て、他者と協同しながら課題を追究し、解決し、新しいことを創造していく力が必要であると言われている。

習得・活用するための力は各教科を中心に身に付け、本校の実践領域である総合的な学習では、よりよく問題解決する資質や能力、主体的・創造的に取り組む態度、学び方やものの考え方、自己の在り方・生き方を考えるなど、学びから新たなことを創造していく力を育てることが求められる。

② 本校児童の実態から

一昨年の全国学力・学習状況調査の結果から、本校児童は、テキストから要点をとらえて内容を正しく理解すること、情報の意味を考え感想や意見を持つこと、自分の知識や経験、考え方と照らして発表・討論するための文章をつくることなど、いわゆるPISA型読解力が十分に育っていないことが課題として明らかとなった。そのため、本校の特色ある教育活動である「階上小スローフード学習」において地域の人材やことがらとかかわる体験的な学習を進めても、「課題の追究が深まらない」「体験したことや調べた事象をもとに考えをまとめたり表現したりすることが十分にできていない」等が実態として挙げられ、総合的な学習のねらいとする、よりよく問題を解決する力が育っていないとの反省も出された。

③ これまでの研究の取組から

これらの課題を踏まえ、平成20年度は、各教科においては「聞く」「とらえる」「話す」力の育成のための指導の工夫を行った。また、総合的な学習の時間は、自分たちの身近な食材から課題を見つけて追究する学習を通して、人々のくらし・産業・環境などの結びつきを考え、くらしを見直し、将来のまちの姿を考える課題解決学習となるように単元を構成した。さらに、その課題解決学習の中に、言語活動を取り入れ、言語を通してかかわり合いながら学び、課題の解決のしかたを工夫させたり、とらえたことを分かりやすく表現させたりする授業の工夫を行った。

その結果、児童が相手に意識をもち、言語を通して互いに伝え合おうとする意欲や態度に改善がみられるとともに、算数科や理科において、数量関係や事象をもとに解き方や実験・観察の結果について説明できる児童が増えてきた。しかし、自分の考えを事象や

数値と結びつけて文章を書いたり，説明したりできる児童は，全体の児童の割合に対してまだ少なく，依然として課題は多い。また，総合的な学習の時間の中で，教科で学習したことを生かして考えたり，まとめたり表現したりすることが十分にできていない。

以上①～③のことから，本校においては，課題意識をもちながら学び，他者を理解し，豊かにかかわることができるコミュニケーション能力を発揮して相手の考えや意見を的確にとらえ，物事を正しく判断し，自分の思いや考えを分かりやすく相手に伝えることができる児童を育てる指導を充実させていくことが必要であると考えている。

本研究が目指す「伝え合う力」を育てることは，物事を言語で理解・整理し，他の人とかかわり合いを考えて行動し，表現することができる児童を育てることであり，総合的な学習の時間のねらいである「学び方が分かり，よりよく問題を解決することができる児童を育てること」につながるものと考えている。

(2) 研究目標

総合的な学習の時間と生活科を中心に，「伝え合う力」を育てるための言語活動を重視した展開・指導の工夫を行い，児童の学力を向上させるための授業展開及び指導の工夫の在り方を提案する。

(3) 研究組織

① 研究推進委員会

校長，教頭，教務主任，副教務主任，研究主任，研究副主任，各学年部長，専門部長で組織し，研究計画や研究方針等について協議する。

② 研究全体会

全職員で組織し，研究にかかわる理論研修や授業研究を行い，研究を共同的に進める。

③ 専門部会

研究にかかわる内容を分担し，専門的な研修を進め，研究全体会に提案・報告する。

授業研究部

- ・指導案，指導過程の提案，修正
- ・事例研究
- ・他教科との関連を図った指導の提案
- ・授業研究，事後検討会の運営

調査研究部

- ・各種調査の実施と結果の分析と考察
- ・資料，記録の管理保管
- ・評価規準の設定及び活用についての提案

学習計画研究部

- ・人材等データベースの作成・整理
- ・階上小の生活科・総合的な学習の時間の全体計画の検討と提案

学年部会

低学年部，中学年部，高学年部，特別支援部の4つの学年部に分かれ，研究の視点に基づいた実践を通して，学力向上に資する指導の在り方を探る。

- ・学年部ごとのテーマ，目指す児童像，学年の計画立案
- ・授業研究の実践
- ・学年部研究のまとめ

(4) 研究内容

① 教員の指導力の向上について

「学力向上を支える土台は現場の教師の指導力である」という意識に立ち，本校では，指導力向上のために大きく3つのことを実施する。

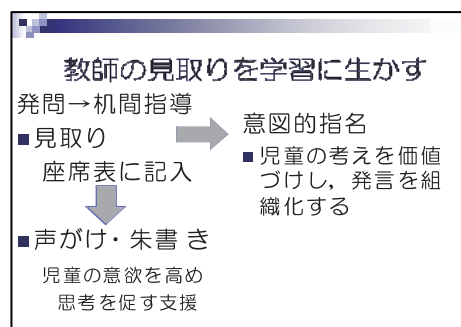
ア 授業実践を中心とした主題研究

総合的な学習の時間及び生活科を中心領域として、先に掲げた主題を設定し、指導の手立てを工夫し、授業実践を行う。授業の分析、児童の変容を考察し、手立ての有効性を検証しながら指導の工夫と改善を積み重ね、指導力の向上を図る。

イ 指導力の向上に向けた授業改善への取組

指導力の向上に向けて本校で重点的に取り組む事項を「発問の力」「児童の学びを見取る力」

「発言を組織化する力」の3点を設定し、日々の授業で工夫・改善を図る。教師の見取りを学習に生かすことについては、図1のように、発問をした後に、見取りを行い、声かけや朱書きによる意欲付け、思考を促す支援を行うとともに、児童の発言を組織化し、学習のねらいを達成するように取り組む。



【図1：発問から意欲付け・意図的指名への流れ】

ウ 外部講師を招聘した教育研修会・講演会

本校が研究で取り組む「総合的な学習の時間の意義」「言葉の力の育成」「授業改善」「個に応じた指導の在り方」などに関して専門的な知識や実践事例が豊富な方から、理論と実践について指導をいただく機会を設定し、教員としての資質の向上を図りながら合わせて指導力の向上を図る。

「総合的な学習の時間の指導」「言葉の力の育成」「授業改善」について

講師 宮城教育大学教職大学院教授 相澤 秀夫 氏

「LDの理解と個に応じた教育実践」について

講師 宮城県気仙沼支援学校 校長 今野 和則 氏

② 児童の学習意欲を高める授業づくりについて

本研究が目指す「伝え合う力」の育成を目指した授業研究主題に掲げた「伝え合う力」を育成するための指導の在り方を探る中で、「学習課題」と「教師の発問・指示・提示の仕方」と「児童の学習活動の様子（書く、話す、聞く、動きなど）」をビデオ、写真、記録用紙で記録し、相互の関係を分析し、学習意欲を高める「学習課題」「学習過程」「発問」「評価」などについて考察する。

(5) 研究の方法

本校の研究主題にある「伝え合う力」を身に付けた児童の姿を「目指す児童の姿」としてとらえ、研究の視点に沿った指導の工夫を取り入れた授業研究を積み重ねる。そして、児童の変容を考察することにより、「伝え合う力」を育てるための効果的な授業展開や指導・支援の在り方を考察する。さらに、そのことが教科で習得する知識や技能、学習を主体的に進める学習者として資質の向上などに、どのような成果として現れたかを分析し考察する。

① 授業実践と分析（指導の手立ての成果と課題の把握）による指導の手立ての考察

授業をビデオ、写真、記録用紙で記録し、教師の指導と児童の活動の相互の関係を分析し、手だての有効性や課題を考察する。記録する事項と分析する内容は次の点である。

ア 記録する事項

- ・ 教師の指導・・・「発問」「指示」「資料提示の仕方」
- ・ 児童の活動・・・「書くこと」「発言」「対話」「学習課題を追究する活動」

イ 分析する内容

- ・ 教師の発問・指示と児童の活動のつながり
- ・ 資料の提示の仕方と児童の活動のつながり
- ・ 学習のねらいの達成度と教師の指導

② 児童の変容の把握と分析

研究の視点に沿った指導の積み重ねによって、児童がどのように変容したかを把握し、指導との関係を分析する。

ア 学力の状況・到達度の把握

- ・ CRT学力テスト
- ・ 全国学力・学習状況調査

イ 言語や他の表現を活用した学びの姿の変容の把握

- ・ ポートフォリオ
- ・ 授業記録

ウ 学習意欲・態度・コミュニケーション能力の変容の把握

- ・ アンケート調査（5月，9月，2月）
- ・ 全国学力・学習状況調査（児童質問）

(6) 「伝え合う力」の定義について

本研究が目指す「伝え合う力」とは「相手，目的や意図，場面や状況などに応じて適切に言語を使って課題を追究することができ，自分と他者・自分と地域（くらしや自然）との新たな関係を考え，表現したり行動したりできる力」であるととらえた。

(7) 目指す児童像の設定について

研究の主題及び目標に基づき，学年部の発達段階に応じて具体的な児童の姿としてとらえられるように目指す児童像（表1）を設定した。

低学年	中学年	高学年
意欲・態度		
体験や思いを友達に話したり，友達の話を聞いたりしようとする態度をもって活動ができる。	進んで，地域の人から学んだり，友達と一緒に協力して調べたり活動したりできる。	友達や家庭，地域の人々とかかわりながら，課題を解決しようとする意欲をもち，共同して活動することができる。
言語能力		
話したいことを決めて，相手に伝えるように順序を考え，大事なことを落とさないように，はっきり話すことができる。	事象や話の要点をとらえ，大事なことを落とさずに，言葉で的確にまとめたり，表現したりできる。	言語で表現された内容を正しく理解し，その中の大切な事柄を適切にまとめることができる。
学び方・学ぶ力		
友達の言葉を受け入れて聞き，体験した内容や気づき，発表の良さを認め合い，自分の学習に生かすことができる。	自分の良いところや友だちの良いところに気づき，自分の考えに生かすことができる。	相手の考えや思いを自分の学習に生かしたり，自分の考えを深めたりすることができる。
ものの考え方・生き方		
話したり，聞いたりすることを通して，友達や地域への関心を深めることができる。	伝え合うことを通して，地域の人々や友だちと進んでかかわり，よりよい関係にしようとする。	互いのもつ考えを多様な方法で比較統合し，よりよい地域社会の貢献を意識することができる。

【表1：伝え合う力の育成における発達段階別「目指す児童像」】

(8) 研究の視点に沿った指導の手だてについて

各視点に沿った指導の手だてを次のように設定した。

視点1 総合的な学習の時間において豊かな言語活動を展開し，かかわり合いながら共に学ぶ場の設定の工夫

- 単元の導入・展開・終末の各段階で言語活動を通して他者とかかわる場を設定する。
- 一単位時間の中に，他者（学級の友だち，地域の人）とかかわる場を設定する。

視点2 自分が伝えたいことを相手に分かりやすく表現させる指導の工夫

- 国語科で学習した内容を活用した言語的な知識・技能を説明，討論，レポートなどに活用させる。

- 各教科で学習して身に付けた表，グラフ図，写真などの読み方，かき方など知識・技能を説明，討論，レポートなどに活用させる。

視点3 互いのよさを認め合い，かかわり合いながら学ぶことのよさに気付かせる 評価活動の工夫

- 聞き手として相手の説明や考えを評価し，意見を伝えさせる。

- 他者とかかわり合う学習の中で、他者のよい点を生かして自分やグループの課題追究に生かす活動をさせる。
- 自分の学習を振り返らせ、自分の成長を自覚させる。
- 教師が児童の活動を見取り、評価を伝える。

(9) 実践事例

① 各視点に基づいた実践のポイント

視点1に基づいた実践

視点1に基づいた手だては、次の2点を柱とする。

ア 「単元の導入・展開・終末の各段階で、目的に応じた言語活動を設定する」

図2のように、各教科・総合的な学習の時間において行う言語活動を整理し、探究的な課題解決に

において、目的に応じた言語活動を取り入れながら、図3のように学習を進めた。

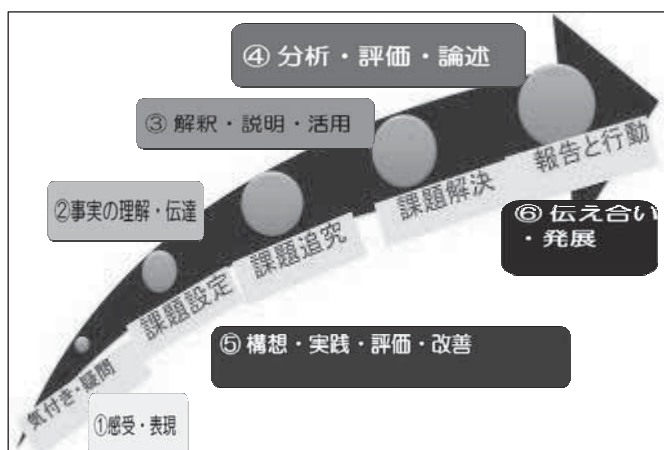
イ 「一単位時間の中に、言語を通して他者とかかわり、自他の学習を深めたり広げたりする学習過程を設定する」

図4のように課題解決学習の中で、対話をさせることで、目的意識を明確にさせるとともに、教科で学習した知識や技能を探究に活用することへの意識を高めるようにした。

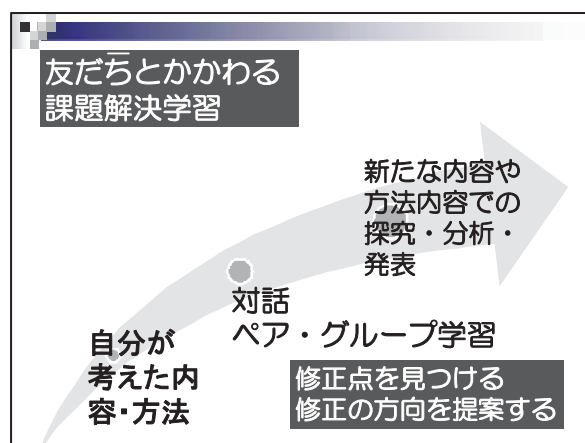
各教科・総合的な学習における言語活動

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について構想を立てて実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

【図2：各教科・総合的な学習の時間における言語活動】



【図3：総合的な学習の時間における言語活動の流れ】



【図4：課題解決学習でのペア・グループ学習】

視点2に基づいた実践

視点2に基づいた「手だて」の「キーワード」を3つ設定した。

一つは「言語化」である。感じたことや考えたことなどを、書いたり、話したりさせることで、自己に向き合わせ、とらえたことや考えたことを整理確かめさせた。

二つ目は「対話」である。ペア学習やグループ学習を授業に取り入れ、対話によって、とらえ方、感じ方、考え方を磨く。そして、根拠や理由についての意識を高め、考えを伝える際には、明確にあらわすようにさせた。

三つ目は「伝える」である。相手に分かってもらいたい、伝えたいという思いを持たせるような学習への取組をさせ、「伝える」ために工夫させたいと考えた。意見や考えを伝える際には、相手意識や伝達方法への意識を持たせるとともに、これまでに習得した知識や技能を活用して課題追究で人とかわり合ったり、まとめたことや考えたことをよりよく伝えたりできるようにした。

視点3に基づいた実践

視点3「評価活動」とは、相互評価・自己評価・教師による評価である。

ア 相互評価

「相手と自分の共通点、相違点」「自分や友達の考えのよさ」「友達の学びのよさ」について互いに評価し、その評価を自分やグループの課題追究に生かすことをねらいとして行った。

イ 自己評価

「かかわりながら学ぶことのよさ」「学んだことのよさ」「自分の成長」について振り返らせ、「学ぶことの楽しさ」や「次の意欲」をもたせるために行った。

ウ 教師による評価

「気付きや考え方のよさ」「学び方のよさ」「他者とのかかわり方のよさ」について評価し、意欲付け、思考の広がりや深化を促すこと、そして、学び方を改善させるために行った。

視点1～3に共通する指導の工夫の重点事項

本年度の指導の工夫の重点は、「ペア学習」「グループ学習」「書くことを大切にした授業」「教師の見取り」を充実させることである。これらは、先に述べた視点1から視点3に沿った指導の手だてに共通するものである

ア ペア学習・グループ学習

ペア学習やグループ学習は、互いに顔を見合わせ、言葉を交わす行為であり「言語活動の原点である「対話」の仕方を身に付けることができる学習である。

さらに、話し合いの場にとどまらず、思考や感情を広げたり深めたりする醸成の場であり、互いの存在を確かめ合い、学びを実感できる機会である。（宮城教育大学教職大学院：相澤秀夫教授の指導より）



この学習で身に付くことは、「言葉の使い方、聴き方、話し方」「言葉を通したひととのかかわり合い方」「ものの見方・考え方・自分を見つめる力」である。

【写真1：グループで気付いたことを伝え合う児童】

イ 「書くこと」

書くことは、「自分と向き合い、自分を確認する行為であり、考える行為である。さらに、感性が磨かれる場である。そして、一過性の体験を経験に高める機能がある」（相澤秀夫教授の指導より）ことから、思考力・判断力・表現力を高めるためには、書く活動を重視した学習が必要になると考える。

「話すこと」と「読むこと・聞くこと」だけを扱って学習活動をさせると、気付いたことや思ったこと、考えたことなど、自分の考えを上手に話せていないという場面に出会うことがある。これは、児童の思考が十分に深められ、整理されないことが原因と考えられる。そこに、書くという活動を挟むことで、情報を整理し、自分と向き合う活動が生まれ、豊かな思考活動・そして表現活動が導き出されると考え実践した。

ウ 教師の見取り

児童の学習がより効果的に、そして、意味を持って行われるためには、教師が児童の学習を「見取り」、学習のねらいに児童を導くために「発言を組織化する」ことが大切であると考える。

教師の見取りを学習に生かすことについては、机間指導がいかになされ、それをどう生かすかが問われる。本校では、座席表を活用し、児童の考えの見取りを行うようにする。そして、児童の意欲を高め、児童の更なる思考を促すために、声かけと朱書きを行う。さらに、見取ったことをもとに、学習のねらいに沿って考えや意見を価値付けし、指名する順番を構成する「意図的指名」をするように心がけた。

② 実践事例1 第1学年 生活科「ちゃまめのひみつをみんなにおしえよう！」

研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 体験した後に、活動を振り返ったり、かかわり合いから得られた思いや考えを話し合ったりして交流する場を設定する。

イ 情報を言葉として自覚させるために、交流して発見したことや気付いたことを文やキーワードで書かせる。

視点2

ウ 自分の意見をはっきりさせ、しっかりと友達に伝えられるようにするために、かかわり合いから得られた思いや考えを書き込み式観察シートに書かせる。

エ 相手意識や目的意識をもたせるために、「だれに」「何を」伝えるのかを書かせる。



【写真2：書き込み式観察シートへの書き込み例】

視点3

オ 目的やレベルの違う繰り返しの体験を意図的に取り組むことで、質問や感想の内容が深まり、かかわりが質的に高められるようにする。

③ 実践事例2 第2学年 生活科「みんなで作ろうフェスティバル」

研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 気付きを促したり気付きを深めさせたりするために、ペアやグループでの話し合いを行う。

イ よりよい考えをもたせるために、ペアやグループでの話し合いの後、自分が気付かなかった友だちの気付きや思いをワークシートに追記させる。

ウ 地域の方とのふれあいを多くもたせるために、フェスティバルについての手紙や招待状を書かせる。

エ 招待した人により楽しんでもらえるように、案内のほか、遊び方やおもちゃの作り方について説明したり、やってみせたりするなど、言葉を交わすいろいろなかかわり方を工夫させる。



【写真3：話し合いの観点を提示する教師】

オ 招待者には、あらかじめ内容等について児童に積極的に質問するように依頼しておく。

視点2

カ 言いたいことが相手にはっきり伝わるように、目的と相手意識をもたせて、ペアやグループでの話し合いをさせる。

キ 個々の思考が深まるように、聞く観点を明確に指示する。

ク 自分の考えを相手に理解してもらえるように、特に伝えたい大切なことを意識させる。

ケ 気付いたことや調べたことを伝えるための多様な方法に触れさせるため、多様な発表の方法を紹介し、自分たちの思いに応じて選ぶ経験を積み重ねるようにする。



【写真4：ペア学習で相手の話を聞く児童】

視点3

コ 互いのよさを認め合い、児童相互のかかわりを深めるために、友だちの良い考えやがんばりを見付けるよう指示すると共に見つけた児童を称賛する。

サ ペアやグループの話し合い等を通してかかわり合いながら学ぶことのよさに気付かせるため、振り返りの時間を設定し、ワークシートに書く欄を設ける。

シ 友達の学びのよさや気付きを全体で共有し、生かすことができるように、気付きが深まる話し合いが見られた児童を見取り、称賛したり、全体に広げたりする。



【写真5：取材のときの話し方の例を示したカード】

④ 実践事例3 第3学年1組

総合的な学習の時間 「名人いっぱい ぼくらの階上！」

研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 課題設定の段階では、課題解決への目的意識を持たせるために、お互いの考えや感想を交流したりしながら、課題を精選したり吟味したりするペア学習やグループ学習の場を設定する。

イ 課題追求の段階では、多様な考えに触れ、話し合いながら学習を進めることの楽しさや、学習への満足感が得られるように、ペア学習やグループ学習を設定する。

ウ 地域の名人（講師）とかかわりながら、見学や体験活動を取り入れ、感想発表や手紙などを通して、一人ひとりが講師の方とのかかわりを実感できるようにする。

視点2

エ 話し合いの観点に合っているかどうかをもとに理由をつけて考えを話すことができるように、観点を提示する。

オ 国語科の単元「自分をしょうかいするスピーチをしよう～知ってほしいな自分のこと」「中心をはっきりさせて話そう～わたしのお気に入りの場所」で話し方や聞き方の技能を身に付けさせたことを応用できるようなワークシートを活用する。

視点3

カ 友だちの学習の工夫を参考にさせたり、自分の取組に自信を持たせたりするように振り返りの時間を設定する。

キ 学習の中で、友だちのよさを自分の学習に生かしている児童の取組を称賛し、自信を持って学習できるようにする。

⑤ 実践事例4

第4学年 総合的な学習の時間 「一粒の米を追って」

研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 課題追究の内容や方法を決める段階、学習活動を振り返る段階で、話し合うことにより、よいものを選んだり決定したりするグループ学習を設定する。

イ ワークシートを活用し、互いの考えを比較したり、よい点を見つけたりし、自分の考えを深めたり、広めたりできるようなペア学習の場を設ける。

ウ 話し合いによってよりよいものが決まっていくということを体験させるため、グループ学習では、複数の考えの中からよいものを選択するための基準を提示する。

視点2

エ 国語科などで学習した発表の仕方や話型などを掲示し、活用させる。

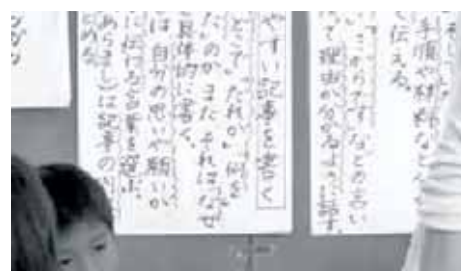
ワークシートや短冊などに「何のために」「何を」伝えたいのか等、自分の考えを文章に書いてまとめることで、考えを明確にさせ、伝えたいことをしっかり持たせる。

オ 「誰に」伝えたいのか、相手を決めさせ、相手意識、目的意識を明確に持たせる。

カ 発表の際は、国語科で学んだ他の人に報告する際の事実や資料の提示の仕方を振り返らせるとともに、自分の話したいこと、伝えたいことを文章に書かせ原稿をつくらせる。

視点3

キ 報告会や発表会では良かったところや感想をもちながら聞くようにし、聞き合う場面



【写真6：国語科の学習を生かすための教室掲示】



【写真7：学習の課題とペア学習の話し合いの観点を提示】



【写真8：学習を振り返り他の人のよさに気付いた児童のワークシート】

では、聞く観点や評価する観点を与えて、評価カードにメモをしながら聞かせ、それを互いに発表させるようにする。

ク 発表会を本番1回だけでなく、リハーサルやプレ発表会などを行い、本番の前に互いに発表を聞き合うなどの見直しの機会を与える。

⑥ 実践事例5

第5学年 総合的な学習の時間「豊かな海，気仙沼～考えよう，気仙沼の水産業～」
研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 課題追究の段階では、多様な考えに触れ、話し合いながら学習を進めることの楽しさや、学習への満足感が得られるように、ペア学習やグループ学習を設定する。

イ 地域の方（講師）とかかわりながら、見学や体験活動を取り入れる。感想発表や手紙などを通して、一人一人が講師の方とのかかわりを実感できるようにする。



【写真9：話し合いながら短冊に課題を書き込む児童】

視点2

ウ ワークシートを工夫し、国語科の単元、「自分の考えを伝えるスピーチをしよう」「会話をはずませよう」「話の組み立てをくふうしてニュースを伝え合おう」を通して身に付けた話し方や聞き方の技能を常に活用できるようにする。

エ 調べてきたことを発表する際には、発表原稿を読むのではなく、表やグラフ、写真などを積極的に活用させるようにする。

視点3

オ 友達とのかかわりの大切さの意識付けを図るために、ワークシートに「友達の学び方のよさを記録させる機会を積極的に設ける。

カ 本時、又は前時の学習活動で、友達のよさを自分の学習に生かしている児童の取組を称賛したり、参考にすることができる活動を紹介したりする。



【写真10：追究する方法について互いにアドバイスをし合う児童】

⑦ 実践事例6

第6学年 総合的な学習の時間 「スローフードをめぐる旅」
研究の視点に沿った手立て

視点1

ア 課題設定の段階では、自分の考えを明確にさせると共に、より深い探求ができる課題を精選せるために、ペアやグループでの話し合い活動を取り入れる。

イ まとめる段階においては、伝えるべき大切な事から吟味し、発信の方向性をグループで共通理解させるために、ペアやグループでの話し合い活動を取り入れる。

ウ ペアやグループでの話し合いにおいて相手がかかわりやすいように、どの部分で悩みアドバイスがほしいと思っているか伝えさせる。

視点2

エ 根拠を示し、相手を納得させる話し方ができるように、5年次に学習した総合的な学習の時間の記録及び新聞記事等資料を収集させ、自分の考えを書かせまとめさせる。また、既習内容が確認できるよう掲示しておく。

オ 書くことによって考えを整理できるよう、考えとその理由とに分けて記録できるようなワークシートを作成する。



【写真11：議論するための自分の考えを短冊に整理する児童】

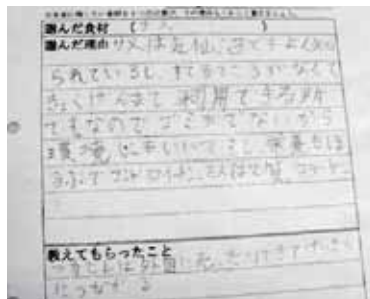
カ 伝え合う場面では、相手の伝えたいことを理解してかかわることができるように、国語科で学習を生かし要点にしぼってメモさせる。

キ 聞き手を意識した発表原稿作り及び発表資料作りができるように、国語科の「ニュース番組を作ろう」を想起させ、順を追って活動させる。

視点3

ク 友達の考えの良さ・取組の良さに気付くことができるよう、ワークシートを活用し、振り返りの時間を設定する。

ケ 個人の良さを全体で共有し、自分の学習に取り入れることができるように、机間指導をしながら児童の気づきを見取り、広げる。



【写真12：他の児童から教わったことを書き込むワークシートの例】

【写真13：児童の学習を座席表に記録する教師】

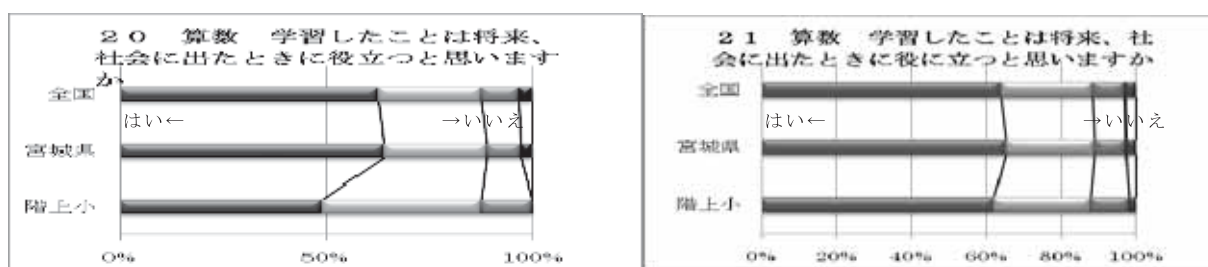
3 研究成果

(1) 言語活動を取り入れた学習過程の工夫による学習意欲の向上と教科内容の習得・活用の力の向上

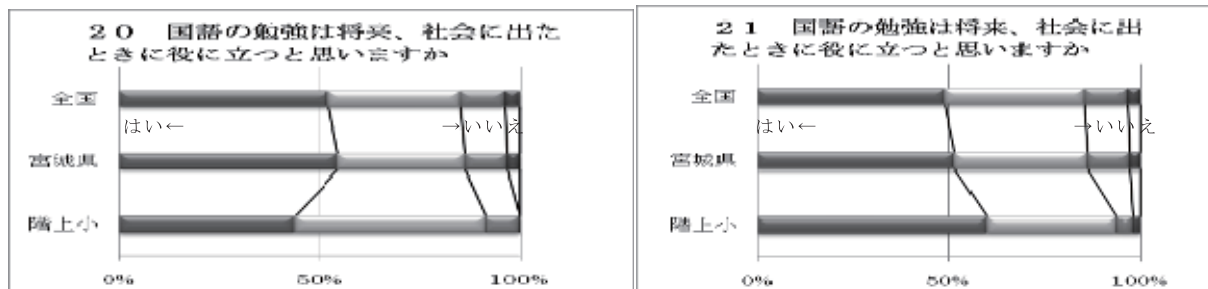
グラフ1、2のように、昨年度と比較して教科で学習したことが将来役立つと思う児童が増加した。学習の大切さを理解して意欲的に学ぶ態度の成長につながったと考える

全国学力・学習状況調査においては、国語科「書く」「聞く・話す」の領域が昨年度と比較して向上がみられ全国平均得点率に近づいた。また、算数科「数と計算」「図形」「数量関係」の領域で全国平均得点率に近づく、あるいは超えた。さらに、国語科・算数科ともB問題の得点率が前年度より向上した。

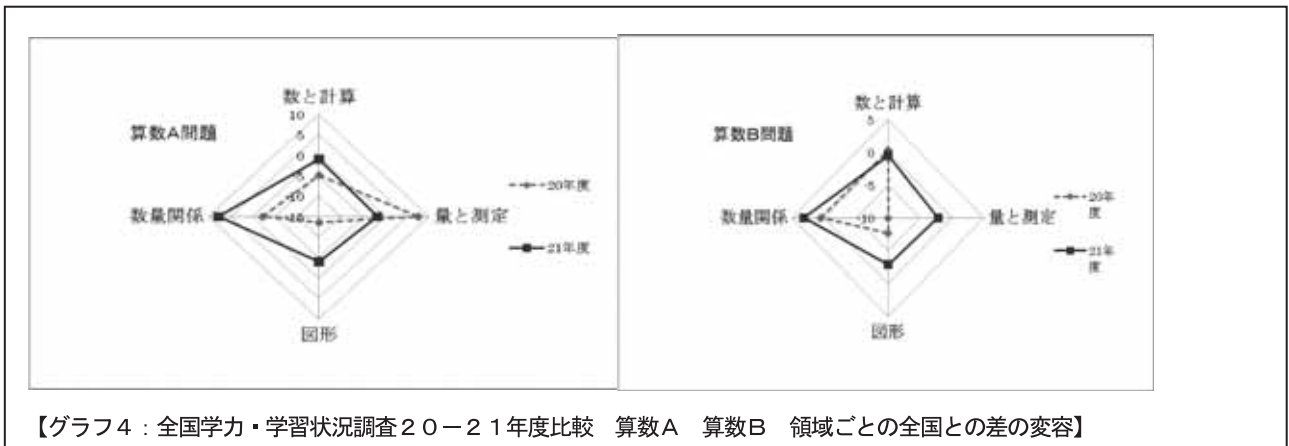
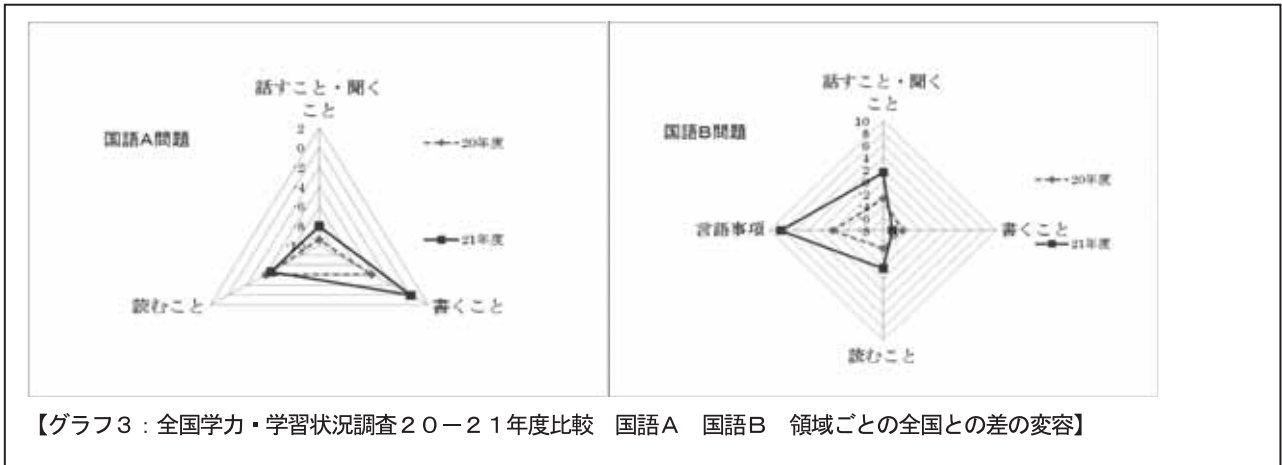
課題解決学習の進行状況やその時間の学習のねらいに応じてペアやグループの言語活動を位置付け、学習を見直したり調べたことについて分析したりしたことで、言語を通じた理解、言語を使った思考や表現の力が向上し、思考力を要する問題にも対処する力の向上につながったと考える。



【グラフ1：全国学力・学習状況調査20-21年度比較 算数で学習したことが将来役立つと思う児童の割合】



【グラフ2：全国学力・学習状況調査20-21年度比較 国語で学習したことが将来役立つと思う児童の割合】



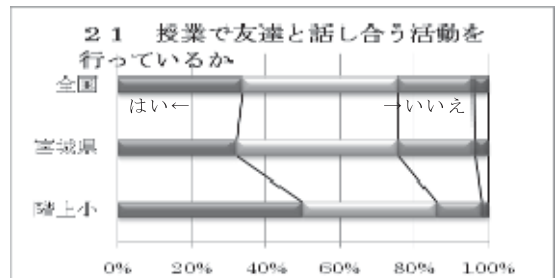
(2) 対話を取り入れた学習過程と評価の工夫による人とかかわり方・学び方の成長

本校では「他者との関係を考え、互いに他のよさを生かして協同的に学ぶこと」を大切にしてきた。グラフ5のように、本校の児童は、授業で友達と話し合う活動を行っているという意識が高い。また、さらに、グラフ6と7のように進んで考えを話したり、相手の考えをきちんと聞いたりする意識・態度が向上しているといえる。

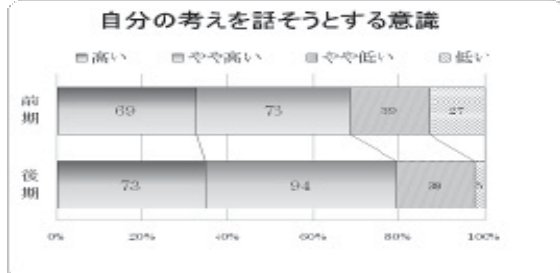
また、解き方や考え方が分かるようにノートに書く

児童の割合が増え、グラフ8のように、相手に伝えるようにすることを意識し、話の組み立てを工夫する児童が増えた。

対話を通して他者とかかわる学習の工夫をしたことで、他者に自分の考えを伝えたり、他者の考えを理解し、よさを生かそうとしたりするかわりながら学ぶ態度が成長した。また、対話の中で相手の考えを評価し、良い点を認め、さらに修正が必要だと判断した点について意見を伝えるようにしたことや、教師が机間指導の中で、学習への取組や対話の仕方についての評価を工夫して伝えたことで、よりよい課題追究の仕方に気づき実践するなど、学び方の面でも成長している。



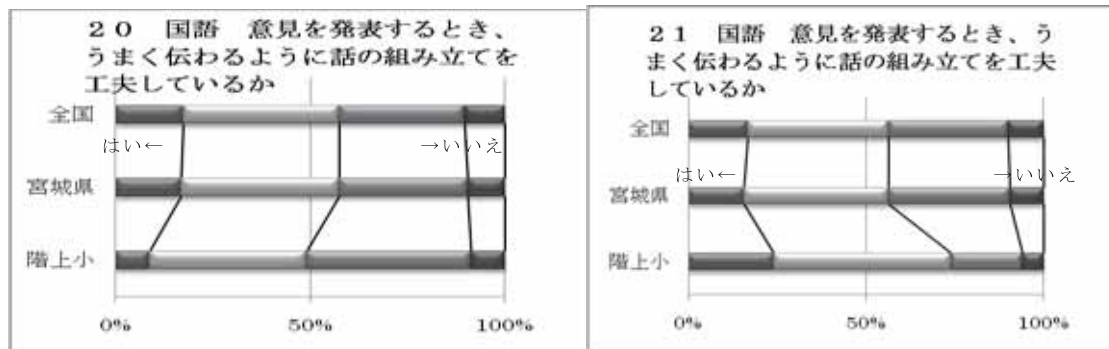
【グラフ5：話し合う活動の実施に対する意識の割合】



【グラフ6：授業中に考えを進んで話そうとする意識】



【グラフ7：本校児童の相手の話をきちんと聞こうとする意識】



【グラフ8：全国学力・学習状況調査20～21年度比較 話の組み立てを工夫している児童の割合】

4 今後の課題と改善策

(1) 課題

- ① 発達段階に応じて身に付けるべき言葉の力の明確化が不十分なため、学習段階に応じてどんな言語活動に取り組みさせることが適切なのか明らかになっていない。
- ② 総合的な学習の時間における課題追究の過程における各教科で学習した知識・技能を主体的に活用していく場面設定の在り方が明らかになっていない。
- ③ 総合的な学習の時間において、児童が主体的に学びを進めるために必要な課題設定の力を十分に身に付けさせることができていない。
- ④ 情報を分析する力、課題解決について考察する力、学習を評価・改善する力が十分に育っていない。

(2) 改善策

- ① 各教科における言葉の力を高める指導の工夫
 言語で理解し、考え、表現し、他者と豊かにかかわりながら学びを進め、自分あるいは全体の課題を追究することができるようにするためには、言葉の力を更に高める必要がある。各教科においても言語活動を適切に取り入れた学びを工夫し実践する。
- ② 総合的な学習の時間における言語活動の一層の充実
 課題解決的な学習の追究過程において、適切な言語活動を位置付け、体験活動や協同する学習を豊かな学びに結びつけていくことが大切である。本年度行った言語活動の位置付けに修正を加え、課題を解決するために必要な力を伸ばす言語活動を位置付けて実践する。
- ③ 総合的な学習の時間と各教科の関連を図った指導の一層の充実
 総合的な学習の時間と各教科の関連を考え、収集した情報を、各教科で習得した知識・技能を活用して概念や法則などを見だし、説明したり課題解決に活用したりすることを意図した指導を工夫し実践することが必要である。
- ④ 学びの成果や課題を実感させる場の工夫
 よりよく課題を解決する力を育てるためには、学びの成果が生かされ、その有益性を実感できる体験や不足している知識・技能について児童自身が自覚できる体験が必要である。課題解決学習を通して生まれた新たな課題を生活の場面で実践させる体験を学習計画に取り入れていくことが必要である。
- ⑤ 児童の学力を向上させる学びをつくり出す「発問・的確な見取り・意図的指名」を適切に行うことができる教師の指導力の向上
 児童一人一人の学習を生かしながら、全員に考えさせながら、学習のねらいの達成につながる授業設計力を磨く。また、発問内容を吟味し的確な言葉で発問する力を身に付けるようにする。さらに、児童の学習を見取り、支援や意図的指名に生かすことができる指導力を身に付けることが必要である。

栗原市立宮野小学校

進んで考え、共に学び合う児童の育成 —国語科における「読む力」を高める指導を通して—

1 学校の実態

児童数130名 職員数13名

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特支	合計
児童数	19	23	26	18	22	21	1	130
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

① 今日の課題から

近年、様々な情報機器の発達により、多種多様な情報が得られる状況になってきている。

しかし、文字を読むことを通しての知識や情報入手、読んだ文字を介しての思考は、自ら意図的に読む機会を設けなければ減少していく現状にある。また、日本人の読解力はOECDの平均程度までに低下しているという状況にあることが示された（H15:OECDによるPISA調査）。このような状況のもと、「これからの時代に求められる国語力」について答申が出され、国語教育を中核に据えた学校教育を行うことが重要であると示された（H16.2月文化審議会）。ここでは、小学校段階から「読む」ことを重視し、国語科で「読む」ことの授業を意図的・継続的に組み立てていかなければならないこと、文章を書くことの指導や自分の考え、意見を述べる機会を多くすることなどにより、論理的な思考力を高めていかなければならないことが述べられている。

これらのことから、児童一人一人の国語力を一層高めていくことが急務であると考ええる。

② 学校教育目標の具現化から

本校では、「自分大すき 友達大すき ふるさと大すき 宮小の子」の育成を教育目標に掲げ、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性の育成を目指している。

中でも、目指す児童像として掲げている「進んで学び考える子」という目標は、児童の学ぶ意欲を高め、基礎・基本の定着を図るとともに、自ら問題を解決しようとする児童の育成をねらいとしている。そのためには、互いのよさを認め合う学級づくりを行うことと同時に、教科学習の基礎ともいえる「国語力」を高めていくことが必要であり、本研究を進めていくことは、学校教育目標の具現化に資することであると考えた。

③ 児童の実態

昨年度の研究により、授業中に大きな声で音読したり、重要語句を辞典で調べたりする児童が増えるなど、国語科の学習に対する関心・意欲の向上が見られた。

しかし、登場人物の心情を叙述に即して読み取ったり、筆者や作者の伝えたいことに対して自分の意見を書いたり、述べたりすることができない児童も見られた。そのため、伝え合う場面になっても、単発的な発表に終始し、自分の考えを深めていくまでには至らなかった。また、昨年度の「全国学力・学習状況調査結果」では、国語のA、B問題において、全国の平均正答率と比べ「読む能力」が低く、「CDT学力テスト」では、「書く能力」が十分ではない結果となった。

音読や朗読などの表現に関しては、業前の「音読タイム」の取組から、学級でみんなと一緒に大きな声を出して音読することには喜んで取り組むようになったが、大勢の前での発表になると声が小さく、自信がもてないまま発表する児童が多く見られる。

今後は、教材に書かれている内容や表現の仕方を読み取る力を身に付けさせるとともに、自分の考えをもち友達と話し合う中で、互いの考えを広げ、深めていくことができるようにする必要がある。

④ 研究の経過から

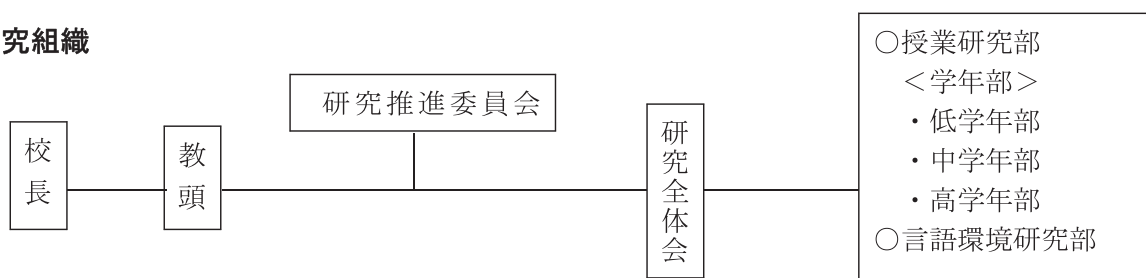
昨年度は、副題を「国語科における伝え合う活動を通して」と設定し、ペア学習を意図的に取り入れ、友達と意見交換をする中で、自分の考えを広げたり、深めたりしながら学び合うことができるように支援してきた。その結果、自分の考えを恥ずかしがらずに話そうという意識の高まりは見られてきたが、読む力が身に付いていないために、自分の考えがもてず、互いの考えを伝え合うまでには至らなかった。そこで、今年度は、児童一人一人の読む力を確実に高められるような指導方法や学習展開を工夫していくことにした。

以上のことから、国語科における「読む力」を高める指導を通して、進んで考え、共に学び合う児童の育成を目指すことで、確かな学力の向上を図っていくこととし、本主題を設定した。

(2) 研究目標

国語科の説明的な文章と文学的な文章の指導において、進んで考えたり、話し合ったりしながら、共に学び合う児童を育成する。

(3) 研究組織



(4) 研究内容

① 教員の教科指導力の向上に向けた取組

- ア 一人2回の授業研究と日々の授業を見合う会を実施する。
- イ 授業研究会は、事前と事後研究会をセットで行う。
- ウ 授業研究会の事前検討会では、「発問と指示作成表」(図1)を活用した模擬授業を取り入れる。
- エ 「学びUP研修会」を企画し、専門的な知識や指導法についての研究を深める。

説明的な文章の発問と指示作成表			
段階	段階のねらい	主な学習活動例	時間
考えをもつ	教材と出会い、その内容の大体をつかませる。	<ul style="list-style-type: none"> ◎屏絵を見せ、連想ゲーム的に言葉マップづくりをさせる。 ○全文範読を聞かせる。 ○おおよかなあらすじをまとめさせる。 「Aという問題を、Bという例を出して、Cということをしていっている」などの型でまとめさせる。(中、高学年) ○初発の感想をまとめさせる。(わかったことなど観点から) ○音読練習をさせる。 (追い読み、交替読み、ペア読み、グループ読み、○読み、輪番読み、ストップ読み、列読み等) ○形式段落を確認させる。 	1 2
		<ul style="list-style-type: none"> ①難語句調べ ②新出、読みかえ漢字練習 ④学習の手引きの「学習課題」 	課外
考えを広げ・深める	「問い」に対する「答え」の見つけ方、形式段落、要点、要約、要旨のまとめる手順を学ばせた上で、筆者の主張を読み解き、それに対する自分の考えをまとめていく。	<ul style="list-style-type: none"> ○「問い」に対する「答え」の段落、文を見つけてさせる。 ○段落の要点を主語、述語を手がかりにまとめさせる。 (「～するピーパー」のように体言止めにまとめさせたり、「～する」の部分に穴埋め式にして提示し、考えさせたりする。) 	段落の教に応じて
主な学習活動		◎中心発問 <指示> (児童の反応)	
1	屏絵を見てお話のイメージをふくらませる。	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさん、ピーパーって知ってますか。どんな動物ですか？ ・これからピーパーの大工事というお話を勉強していきます。 ・ピーパーは何を工事していくのでしょうかね。 ＜P23を聞かせる。＞ ◎まず最初に屏絵を見てごらん。何やら湖の真ん中に何かがありますね。何でしょう？ (島です。) 	
2	範読を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> 以下が発問例をもとに児童と対話をしながら、お話のイメージをふくらませていく。児童が発表した言葉を黒板に書き、線でつないでいく。＝言葉マップづくり ①島は島でも何でできているのかな？ ・ ・ ・ 木、土 ②水や土はどこからもってきたのかな？ ・ ・ ・ 森の中、 ③どうやってもってきたのかな ・ ・ ・ ？ ④島はだれがつくったのかな ・ ・ ・ ピーパー ⑤何で真ん中に島をつくったのかな ・ ・ ・ 安全 ＜意味が分からない言葉や読み方がわからない言葉があった時は鉛筆で○で囲みながら聞いてください＞ ◎この「ピーパーの大工事」を聞いて、自分が「初めて分かったこと」は何か？ 「なんでもかと思っただことはどこか」を見つけてみましょう。 ＜初めで分かったこと＞を発表してください。 ＜短くは書かせ、自分の考えと比較させる。＞ ＜なんでかなと思っただこと＞を発表してください。 この後、黒板でたがいの考えを類型化していき、＜なんでかな＞の部分課題へ取り上げていく。 予め、教師が課題として取り上げる内容を準備しておき、それに近い内容の疑問が出るように発問内容を工夫していく。 	
3	自分がこの話を聞いて、分かったことや何でかなと思っただことを見つけていく。		
4	自分の考えを発表する。		

<図1 説明的な文章の「発問と指示作成表」>

② 児童の学習意欲を高める授業づくり

ア 「読む力」を高める授業づくりについて、「考えをもたせる工夫」「考えを広げ・深めさせる工夫」「考えを広めさせる工夫」の3つの手だてを設けて取り組む。

イ 説明的な文章及び文学的な文章の指導において、「読む力」の系統性を明らかにし、児童に身に付けさせたい「読む力」を押さえた授業展開をする(図2, 3)。

ウ 説明的な文章及び文学的な文章における基本的な授業展開モデルを作成する。

エ 「学習の手引き」や学習計画表を作成し、学習に対する見通しをもたせる。

③ 児童の学習習慣の形成

ア 家庭学習の内容や学校において身に付けさせたい学習訓練, 学習習慣について検討をする。

イ 「家庭学習カード」の内容や形式を検討する。

説明的な文章の指導における身に付けさせたい「読む力」とその手だて	
身に付けさせたい「読む力」	手だて
① 扉絵や題から、文章全体をイメージする力	絵を見たり、題から思いついた言葉やよすを自由に発表させる。
② 文章の概観をとらえる力	題をもとに、「Aについて、Bだと言っている話」という文型でまとめさせる。
③ 「問い」と「答え」の文を基に文章全体の構成と内容の大体をとらえる力	順序を表す言葉に着目させる。 語尾「～か?」「～なのです。」に着目させる。
④ 読後の感想を簡単にまとめる力	「分かったこと」「おもしろかったこと」などの観点からまとめさせる。
⑤ 中心文を見つけ、要点をまとめる力	中心文の主語、述語を「述語→主語」に書き換えた体言止めで小見出しをつくらせる。
⑥ 意味段落に分け、文章構成(段落相互の関係)をとらえる力	文章構成図を書き、小見出しを基に段落相互の関係を検討させる。 指示語や接続語に着目させる。
⑦ 事実と意見を区別し、文章全体を要約する力	文章には、「頭括型」「尾括型」「双括型」があることを理解させる。
⑧ 読後の感想をまとめる力	「今後自分で調べてみたいと思ったこと」などの観点からまとめさせる。
⑨ 要旨をとらえ、筆者の主張や書き方を検討する力	筆者の主張に自分は賛成かどうかを考えさせたり、論の進め方に対して、分かりやすい点や分かりにくいなどをもとに考えさせる。
⑩ 筆者の書き方や表現、内容に関する感想や意見をまとめる力	筆者の書き方や論の進め方等について、自分の考えを書いたり、交流したりしながらまとめさせる。

<図2 説明的な文章の指導における身に付けさせたい「読む力」とその手だて>

文学的な文章の指導における身に付けさせたい「読む力」とその手だて	
身に付けさせたい「読む力」	手だて
① 扉絵を見て、イメージをもつ力	絵を見て想像したことや言葉を発表させる。
② 登場人物や中心人物をとらえる力	物語に登場する人、物を書き出し、気持ちが大きく変わった人物はどれかを検討させる。
③ あらすじを大まかにとらえる力	「A(中心人物)がB(事件、出来事)によってC(結末や心情)になった話」という文型でまとめさせる。
④ 場面をとらえ、その様子を想像しながら読む力	時、場所、季節を表す言葉を手がかりに場面を分け、中心人物の言動に着目させる。
⑤ 物語を読んで自分なりの感想をまとめる力	中心人物に同化させて考えさせる。(劇化、ペープサート、手紙文など)
⑥ 場面(事件、出来事)に分け、登場人物の気持ちを読み取る力	中心人物の言動に着目させ、体言止めで場面の見出しをまとめさせる。
⑦ 中心人物の気持ちが大きく変容したところ(クライマックス)をとらえる力	中心人物の気持ちが大きく変化したことが分かる文を見つけて考えさせる。
⑧ 物語の全体を通して、中心人物に対する感想をまとめる力	クライマックスの場面を基に、中心人物に対する感想をまとめさせる。
⑨ 中心人物の生き方や主題をとらえる力	中心人物の性格や気持ちに変容した要因、題名を基に考えさせる。
⑩ 主題や中心人物の生き方に対する感想や意見をまとめる力	主題や中心人物に対して、自分の考えを書いたり、交流したりしながらまとめさせる。

<図3 文学的な文章の指導における身に付けさせたい「読む力」とその手だて>

(5) 研究の方法

- ① 授業実践及び授業研究
- ② 学習（情意面・認知面）に対する意識調査の実施及び結果の分析と考察
- ③ 全国学力・学習状況調査及びCDT学力検査の結果の分析と考察
- ④ 外部講師を招いた研修会（学びUP研修会）の開催
- ⑤ 文献による理論研究と先進校視察

(6) 研究主題について

- ① 「進んで考え」とは
文章の内容や表現の仕方を読み取るために、文章に立ち返って読み返したり、調べたりして自分の考えをもととする意識や態度ととらえた。
- ② 「共に学び合う」とは
友達の考えを聞いたり、友達と話し合ったりして、互いの考えを広げ・深めようとする意識や態度ととらえた。
- ③ 「読む力」とは
作品に書かれている内容や表現の仕方を読み取り、それを基に感想や意見をもち話し合う力ととらえた。

(7) 学年部の目指す児童像について

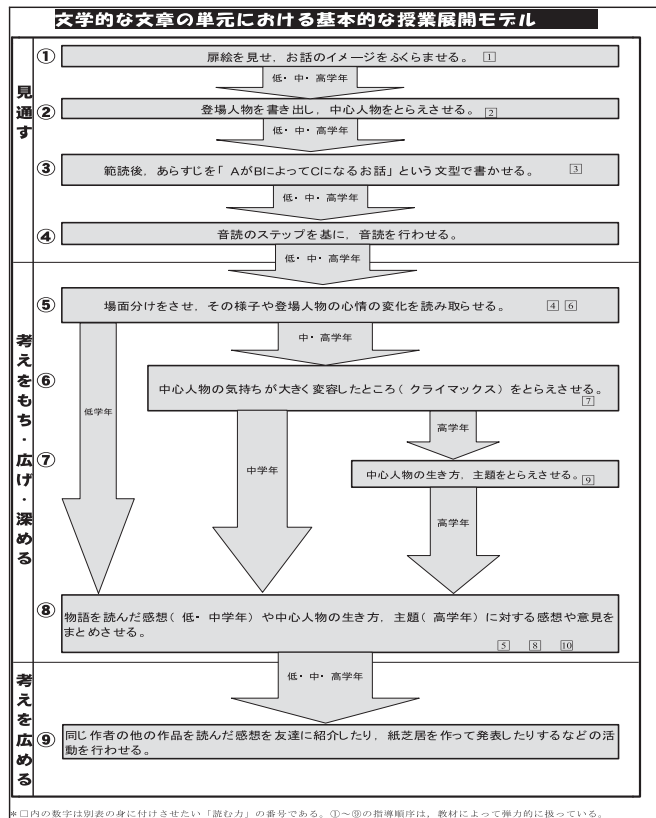
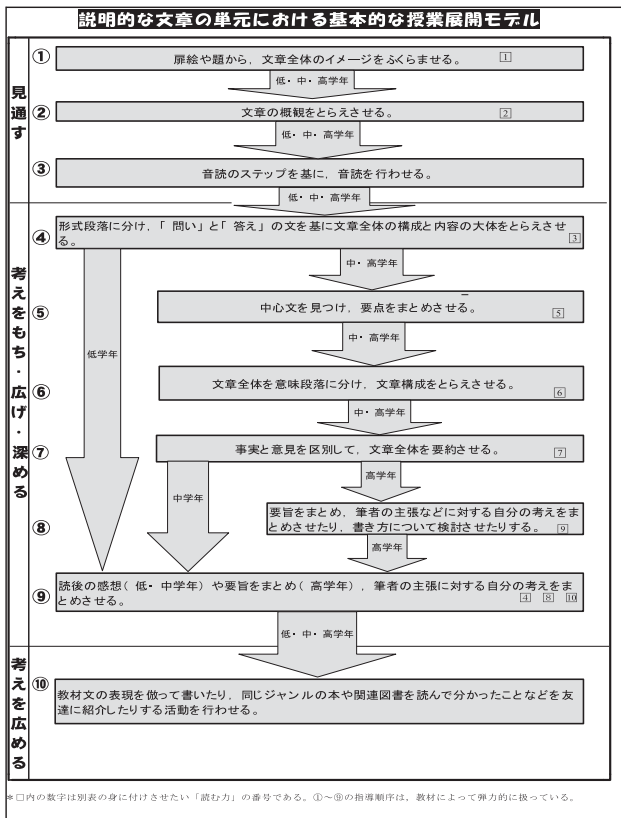
低学年部：内容の大体を読み取り、自分の考えをまとめ、発表し合うことができる児童
 中学年部：内容の中心を読み取り、発表し合い、考えの違いに気付くことができる児童
 高学年部：内容を的確に読み取り、自分の考えを明確にして話し合い、考えを広げ・深めることができる児童

(8) 研究の視点及び専門部の取組内容について

以下の視点を設け、研究目標達成に迫っていく。

視点1：「読む力」を高める授業づくり	視点2：学びを支える学習環境づくり
(1) 考えをもたせる工夫 ① 学習課題の吟味 ② 内容や表現の仕方を読み取らせる言語活動の工夫 (2) 考えを広げ・深めさせる工夫 ① 発問の吟味 ② 学び合う場の設定 (3) 考えを広めさせる工夫 ① 学んだことを生かした表現活動の工夫	(1) 「読む力」を育てる工夫 ① 読書・音読タイムの充実 ② 読書カードを活用した読書の推進 ③ 読み聞かせの会の実施 ④ 教室でのスピーチの実施 ⑤ 学芸会や集会時における発表の場の設定 (2) 家庭学習の習慣化と保護者への啓発 ① 家庭学習カードの活用 ② 保護者への啓発プリントの作成
授業研究部の取組	言語環境研究部の取組
① 説明的な文章及び文学的な文章の単元における基本な授業展開モデルの作成 ② 身に付けさせたい「読む力」の検討 ③ 内容を読み取らせたり、自分の考えを広げ・深めさせたりする学習課題と発問の吟味 ④ 学び合いを深める学習形態の工夫 ⑤ 単元末の言語活動の工夫 ⑥ 指導に生かす評価の工夫 ⑦ 「学習の手引き」の作成	① 児童の実態調査の実施、結果の分析と考察 ② 業前活動の工夫（音読タイムの内容の工夫、読書タイムでの読み聞かせの会の設定） ③ 読書カード等を活用した読書の推進 ④ 教室でのスピーチの進め方・内容の吟味 ⑤ 表現活動を盛り込んだ行事・集会活動の実施 ⑥ 家庭学習カードの効果的な活用と保護者への啓発 ⑦ 学習意欲を引き出す教室・廊下等の経営

視点1は、日々の授業の中で実践を深めていく。そこで、昨年度作成したものを基に、身に付けさせたい「読む力」(図2, 3)を踏まえて、「説明的な文章及び文学的な文章の単元における基本的な授業展開モデル」を修正し作成した(図4, 5)。



<図4 説明的な文章の単元における基本的な授業展開モデル>

<図5 文学的な文章の単元における基本的な授業展開モデル>

(9) 実践事例

① 実践事例1

視点1：「読む力」を高める授業づくりの実践 【①考えをもたせる工夫】<学習課題の吟味>

【学年・題材名】 1学年・「てがみ」

【本時のねらい】

手紙を書いたきつねの子の気持ちを読み取る。

【提示した学習課題】

てがみをかいたきつねのこのきもちをかんがえよう。

【実践から分かったこと】

学習のねらいを行動目標化し、「～を読み取ろう。」というめあて的な表現にして課題を提示したことにより、児童は、見通しをもって学習に臨むことができた。また、課題に続き挿絵を提示してきつねの子の気持ちを想像させたことにより、児童は、きつねの子に同化して自分なりの考えを次々と発表していった。このことから、課題、挿絵の提示に続く主発問の吟味をしていくことの重要性を改めて確認することができた(写真1)。

【実践の手だて】

児童が学習に見通しをもてるようにするために、ねらいに直結した内容で課題文を提示する。

【身に付けさせたい「読む力」】

場面をとらえ、その様子を想像しながら読む力



<写真1 課題と挿絵の提示>

②実践事例2

視点1：「読む力」を高める授業づくりの実践 【①考えをもたせる工夫】
＜内容や表現の仕方を読み取らせる言語活動の工夫＞

【学年・題材名】 4学年・「ヤドカリとイソギンチャク」 【実践の手だて】

【本時のねらい】

省略されている主語を見つけさせ、中心文を体言止めでまとめさせる。

イソギンチャクがヤドカリに付いていることの利益を読み取る。

【行った言語活動】

- ①キーワードにサイドラインを引かせる活動
- ②辞書で意味を調べさせる活動



【身に付けさせたい「読む力」】

中心文を見つけ、要点をまとめる力

＜写真2 辞書で調べる＞ ＜写真3 サイドラインを引く＞

【実践から分かったこと】

「答え」の段落からキーワードの意味を辞書で調べさせたり、中心文の主語と述語にサイドラインを引かせたりした。そして主語を文末にして体言止めでまとめさせていった。この活動を他の段落でも繰り返し行ったことにより、「まとめ方が分かった」とつぶやきが聞かれるようになった。このことから、要点のまとめ方を学ばせる上で、キーワードの辞書引きや主語、述語へのサイドラインを引く活動の重要性を確認することができた(写真2, 3)。

③ 実践事例3

視点1：「読む力」を高める授業づくりの実践 【②考えを広げ・深めさせる工夫】
＜学び合う場の設定＞

【学年・題材名】 2学年・「ビーバーの大工事」

【本時のねらい】

安全な巣を作って暮らすビーバーの知恵を読み取る。

【学び合う場の設定】

課題に対する自分の考えをノートに書かせた後、少人数で意見を交流させ、発表ボードに書かせ、それを基に全体で検討させる場を設定した。



【身に付けさせたい「読む力」】

文章全体の内容の大体をとらえる力

＜写真4 発表ボードに考えを書く児童＞ ＜写真5 発表ボード＞

【実践から分かったこと】

学び合う場において、個→少人数→全体というステップで課題に対する考えを話し合わせていった。少人数の話し合いの場合は、2～3人程度だと効率よく話し合いを進めることができた。自分の考えをもてないままに話し合いに参加していた児童も見られたので、全体→個→少人数→全体というように学習形態を弾力的に扱っていくことの必要性が分かった(写真4, 5)。

④ 実践事例4

視点2：学びを支える学習環境づくり 【①「読む力」を育てる工夫】

＜読書・音読タイムの充実＞

音読タイムでは、昨年度作成した「音読タイムのステップ」を踏まえ、詩をいろいろな音読バリエーションで楽しみながら暗唱している。また、読書タイムでは、市立図書館から貸し出しされたいろいろなジャンルの本を読ませ、読書に親しませている（写真6，7）。



＜写真6 音読タイム＞



＜写真7 読書タイム＞

視点2：学びを支える学習環境づくり 【①「読む力」を育てる工夫】

＜学芸会や集会時における発表の場の設定＞

学び合う基本は、表現することに対する抵抗を少なくし、表現することの楽しさやすばらしさを味わわせることである。

そこで、朝や帰りの会にスピーチをする時間を設定し、テーマにそって発表したり、伝え合い集会で、各学年ごとに発表したりする機会を設定している（写真8，9）。



＜写真8 教室での発表＞



＜写真9 伝え合い集会の様子＞

⑤ 実践事例5

外部講師を招いた研修会（学びUP研修会）の開催

今年度は、外部講師を招き、国語に関する指導法等について学ぶ機会を作り、教員の資質の向上を図ってきた。

＜第1回学びUP研修会＞

日時：平成21年8月31日（月）

講師：宮城教育大学附属小学校 主幹教諭 滝野澤清史先生

講話：「『読解力』を高める指導の在り方 ー模擬授業を通してー」

- ①教材研究を深める模擬授業について
- ②授業で留意していることについて
- ③ノート指導について
- ④学級づくりについて
- ⑤日常の積み上げについて

＜第2回学びUP研修会＞

日時：平成21年12月9日（水）

講師：栗原市立若柳小学校 教諭 石川敦先生

講話：「説明的文章の読解力及び表現力を高める国語指導の在り方」

- ①「読む」ことについて
- ②説明文の読解力について
- ③説明文の系統性、用語について
- ④説明文の指導について

＜第3回学びUP研究会＞

日時：平成21年12月18日（金）

講師：宮城教育大学教職大学院 准教授 吉村敏之先生

講話：「子どもの可能性を引き出す授業 ー教師に求められる力ー」

- ①子供から学ぼうとする姿勢をもつ
- ②授業の中の子供から学ぶ
- ③自分の授業の問題を自覚する
- ④子供一人ひとりの思考をつかむ

3 研究成果

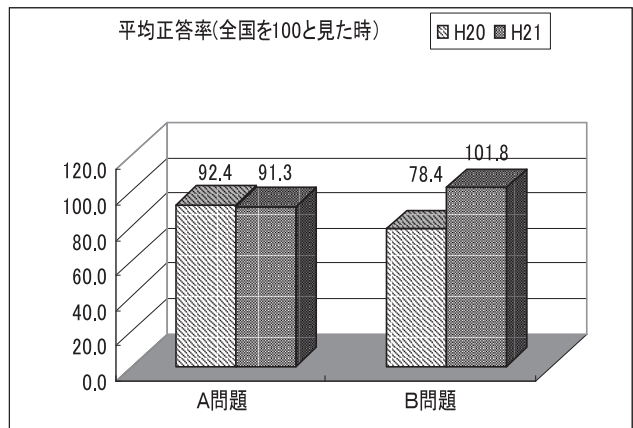
(1) 調査等の結果

① 全国学力・学習状況調査の結果について
(H21年4月実施)

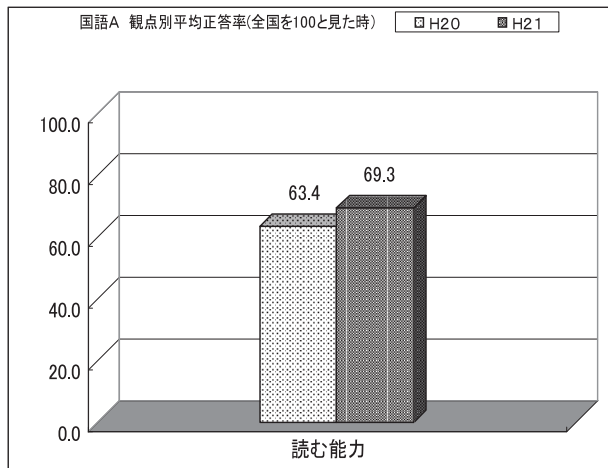
平成20年度においては、A、B問題ともに全国の平均正答率を下回っていたが、平成21年度においては、B問題で全国の平均正答率を上回った。(グラフ1)。

観点別平均正答率でも「読む能力」においては、A問題で昨年度より向上が見られた。また、B問題についても、全国平均正答率を上回るとともに、昨年度よりも大きく向上した(グラフ2, 3)。

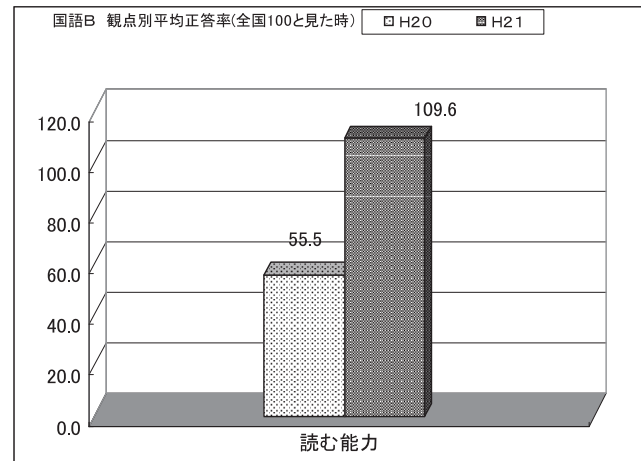
こうした結果から、「読む能力」の育成が図られてきていると考える。



<グラフ1 全国学力・学習状況調査平均正答率>



<グラフ2 全国学力・学習状況調査国語A
観点別平均正答率>

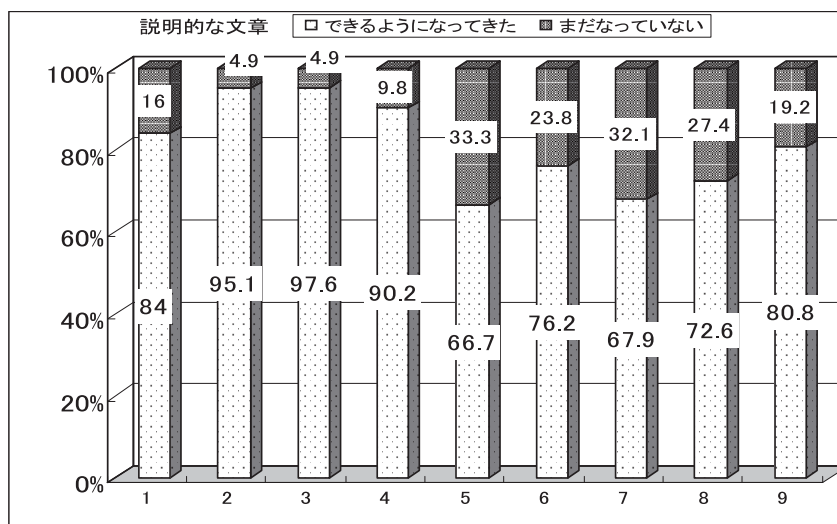


<グラフ3 全国学力・学習状況調査国語B
観点別平均正答率>

② 児童の意識調査の結果について (H22年2月実施)

ア 説明的な文章の学習については、「内容のだいたいをつかむ」、「形式段落に分ける」、「内容を正しく読み取る」ことができるようになってきたと児童はとらえている。

一方、「要点をまとめる」「段落相互の関係をつかむ」「文章を要約する」の項目については、まだできていないとする児童が多い(グラフ4)。



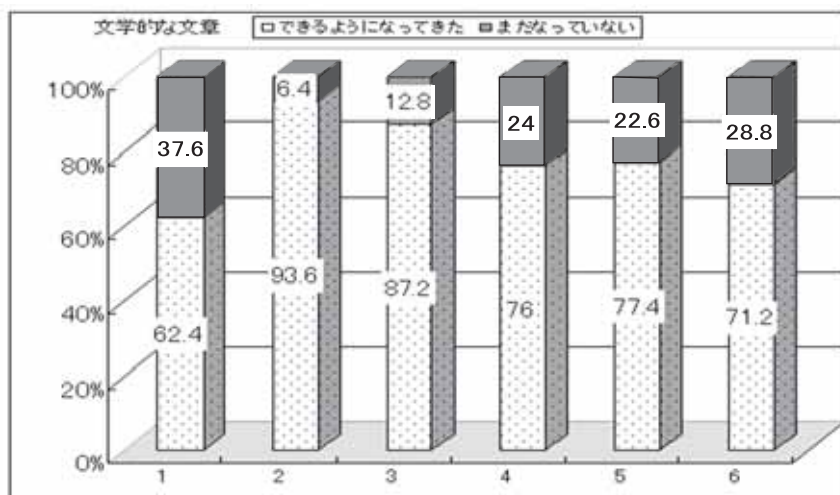
<グラフ4 説明的な文章における「読む力」に関して>

- 1 題名や絵から内容を考える。
- 2 内容のだいたいをつかむ。
- 3 形式段落に分ける。
- 4 内容を正しく読み取る。
- 5 要点をまとめる。
- 6 意味段落に分ける。
- 7 段落相互の関係をつかむ。
- 8 文章を要約する。
- 9 読後の感想を書いたり、発表したりする。

イ 文学的な文章の学習については、「登場人物（中心人物）をとらえる」、「粗筋をつかむ」ことができるようになってきたとする児童が多い。

一方、「題名や絵から話の内容を考える」、「読後の感想を書いたり、発表したりする」ことについては、まだできていないとする児童が目立った。

ウ 説明的な文章及び文学的な文章ともに、ほとんどの項目において、できるようになってきているとする児童が多いことから、「読む力」の高まりを感じていることが分かる（グラフ5）。



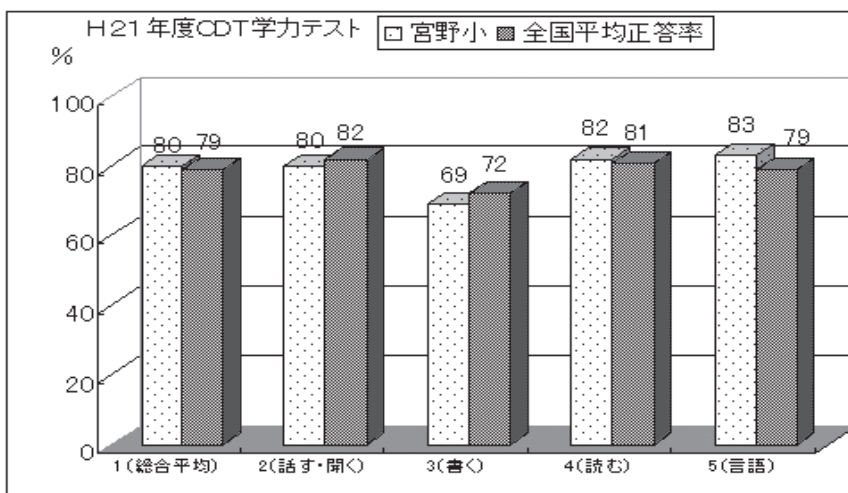
- 1 題名や絵から話の内容を考える。
- 2 登場人物(中心人物)をとらえる。
- 3 粗筋をつかむ。
- 4 登場人物の心情を読み取る。
- 5 クライマックスをとらえる。
- 6 読後の感想を書いたり、発表したりする。

<グラフ5 文学的な文章における「読む力」に関して>

③ CDT学力テストの結果について（H21年12月実施）

「書く能力」については、全国においても平均正答率が他の観点より低い結果となっているが、本校においても同じ傾向であった。

一方、総合平均正答率では、全国を1ポイント上回った。また、「読む能力」、「言語に対する知識・理解・技能」の観点については、全国の平均正答率を上回っていることから「読む力」が高まってきていると考える。



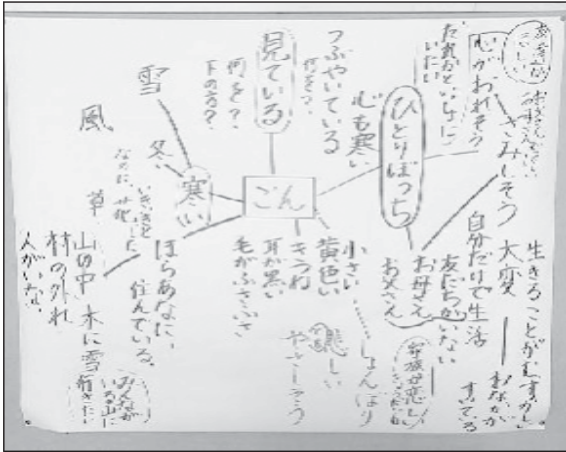
- | | |
|--------|------------------|
| 観
点 | 1 総合平均正答率 |
| | 2 話す・聞く能力 |
| | 3 書く能力 |
| | 4 読む能力 |
| | 5 言語に対する知識・理解・技能 |

<グラフ6 CDT学力テストの結果>

(2) 視点1『「読む力」を高める授業づくり』について

① 「考えをもたせる工夫」

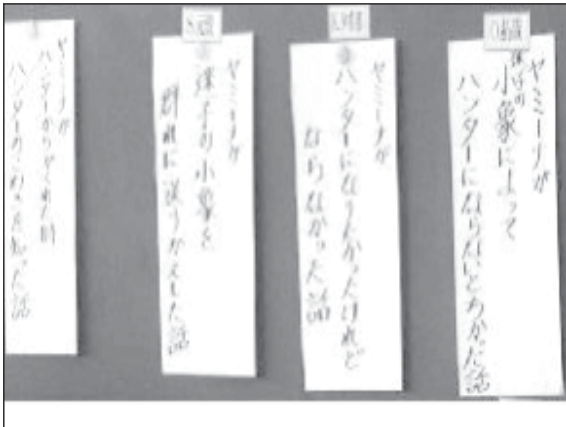
考えをもたせるために、単元導入段階では、扉絵から連想した言葉をまとめる活動（言葉マップづくり）（写真10）を取り入れ、教材の内容に対するイメージを膨らませてきた。また、場面や段落の要点を体言止めでもとめたり（写真11）、お話の全体を「AがBによってCになる話」という文型にまとめたりする課題を提示し（写真12）、ペア等の学習形態で話し合わせてきた。その結果、自分の考えをもてるようになってきているとともに、学習することを楽しさを感じる児童が増えてきた（学習感想1）。



〈写真10 言葉マップづくり〉



〈写真11 字数を数えてから体言止めにまとめている様子〉



〈写真12 粗筋を「AがBによってCになる話」にまとめる〉

今日は、イソギンチャクがヤドカリの貝がらにつくことの利益について読み取る勉強でした。問いをまとめたり、答えを30字以内でまとめたりすることをしました。最初はなかなか30字以内にまとめることができなかったけど、友達といっしょに考えたら、うまくまとめられてうれしかったです。わたしは、先生が言った字数で段落の見出しを考える勉強が楽しかったです。今度、また次の時間も同じような勉強をしてみたいです。〈4年児童〉

(学習感想1)

② 「考えを広げ・深めさせる工夫」

自分の考えを広げたり、深めたりするために、教材に対しての自分なりの題を考えさせたり、主題を検討する課題を提示し、ペア→全体というステップで話し合わせたりしてきた。その結果、友達と自分の考えの違いに気付くとともに、それぞれの考えのよさを見付けることができるようになってきた (学習感想2)。

今日は、自然のかくし絵の勉強で、自分ならどういふ題をつけるかを考えました。最初のうちは難しかったけど、となりの席の友達といっしょに勉強をしているうちに、いい考えがうかんできました。自分が考えた題もよかったけど、友達の考えた題もいいなと思いました。また、こういう勉強をしてみたいです。〈3年児童〉

(学習感想2)

③ 「考えを広めさせる工夫」

読み取ったことを生かし、オリジナル絵本を作って発表したり (写真13, 14)、関連した他の本を読む活動(写真15)を行ったりするなど、学年の発達段階に応じた言語活動を行わせた結果、言語活動そのものを楽しんでいる児童が多くなってきている (学習感想3)。



〈写真13 オリジナル絵本づくり〉



〈写真14 絵本を発表する児童〉



〈写真15 関連する本を読む児童〉

ぼくは、自然のかくし絵の題の意味が最初は分からなかったけど、勉強していくうちにその意味が分かりました。分かったことをパンフレットにまとめる勉強もとても楽しかったです。またやってみたいと思いました。<3年児童>

(学習感想3)

(3) 視点2「学びを支える学習環境づくり」について

① 「『読む力』を育てる工夫」

	月	火	水	金
8:15	読書タイム	朝会	音読タイム	チャレンジ視写
8:30	(自由・読み聞かせ)	伝え合い集会		

読書タイム、伝え合い集会(月2回)、音読タイムの実施(写真16,17)に加え、今年度、新たにチャレンジ視写を取り入れた。その結果、丁寧に速く視写する力が身に付いてきた(学習感想4)(写真18)。また、各学年の発達段階に応じた内容で、テーマを決めて教室スピーチを行わせたり、伝え合い集会での活動や全校集会の中で感想を発表する機会を増やしたりしたことで、発表への抵抗が少なくなってきた(学習感想5)。



<写真16 音読タイムの様子>

21年度 音読タイム実施教材一覧表(案)

月	1年	2年	3年	4年	5年	6年
4月	「あいさつ学校つくろうよ」 「ことばは心」(作:せがわ えいし)					
5月	「アエイウ エオアア」 (宮沢章二)	「ちようちよと ハンカチ」 (宮沢章二)	「うめの花」 (宮沢章二)	「ともだち」 (工藤直子)	「子どもが 笑うと」 (新川和江)	「朝のリレー」 (谷川俊太郎)
6月	「はるを つまんで」 (宮沢章二)	「だれかしら」 (与田準一)	「ああ どこから」 (まど・みちお)	「きりん」 (まど・みちお)	「あめ」 (山田今次)	「あこがれ」 (新川和江)
7月	「ぶんこ」 (おかもと たみ)	「たんじょうび」 (工藤 直子)	「きようからは せみ」 (後藤れい子)	「夕だち」 (村野四郎)	「村の 有線放送」 (高橋忠治)	「火を かこんで」 (石川道雄)
9月	「感謝祭」に向けて選択した詩の朗読練習					
10月	「学芸会」に向けて台本の音読・朗読練習					
11月	「おちば」 (与田 準一)	「ぶぶん ぶん！」 (荏前 武)	「じつと 見ていると」 (高田 敏子)	「ぎんなん の木」 (佐藤 義美)	「けれども 大地は」 (新川 和江)	「ゆずり葉」 (河井 静若)
12月	「きりんは ゆらゆら」 (ふしか えつこ)	「かぜのなかの おかあさん」 (阪田 寛夫)	「みんなの星」 (佐藤 義美)	「なんて おもったら」 (佐野美津男)	「山から降り てきた人」 (原田 直友)	「冬が来た」 (高村光太郎)
1月	「ふしぎな やま」 (岸田 稔子)	「さかなやの おつちゃん」 (畑中 圭一)	「ゆき」 (草野 心平)	「ぼくは 何を」 (まど・みちお)	「うたよ」 (まど・みちお)	「夕ぐれの時 はよい時」 (堀口 大智)
2月	「ちいさい おおきい」 (番山 美子)	「石ころ」 (まど・みちお)	「とうふの ひょうき」 (松谷みよ子)	「かえるとたま ことつくり」 (松谷みよ子)	「別れて いよこし」 (大洲 秋登)	「小顔なる 古城のほとり」 (島崎 藤村)
3月	卒業式に向けて「お別れの言葉」の朗読練習					

【出典は、音読集(光文書院出版。まど・みちお、瀬川栄志:監修)より】

<写真17 音読タイム実施教材一覧表>



<写真18 視写に取り組んでいる様子>

今日は、チャレンジ視写がありました。ぼくは前よりじょうずにはやく書くことができるようになってきました。先生にもほめられました。とてもうれしかったです。<2年児童>

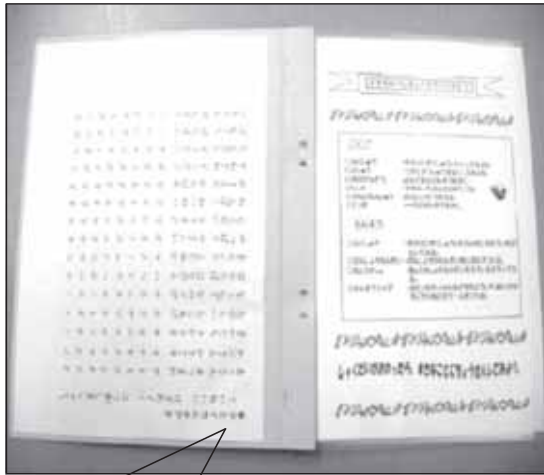
(学習感想4)

今日は5年生が伝え合い集会で発表しました。歌を歌ったり、曲を演奏したりしました。発表の後、2,4年生のみなさんから「とてもきれいな歌声で上手でした。……。」という感想をもらいました。とてもうれしかったです。<5年児童>

(学習感想5)

② 「家庭学習の習慣化と保護者への啓発」

4月の学級懇談会において、保護者に家庭学習カードの使い方を説明した。家庭学習カードは、児童が保護者とコミュニケーションをとりながら書くものとし、児童の学校生活や学習への意欲を高め、学力向上にも効果があることを話した。カードは、連絡帳と本読みカードを兼ねて使えるような形式にし、児童の頑張り等を保護者に伝えるように心がけた。その結果、児童の学習に対して目を向ける保護者が増えてきた(写真19)。



表紙の裏には「音読タイム」の月ごとの詩を貼付し、家庭でも練習できるようにした。

「本読み」「宿題」「自主学習」の欄を設け、学年の発達段階に応じて活用できるようにした。



ファイルの右側に、学校と家庭との連絡用紙を貼ることで、保護者から、子供の学習の様子についてのコメントも寄せられた。

<写真19 家庭学習カード>

4 今後の課題と改善策

(1) 視点1『読む力』を高める授業づくりについて

「読む力」を高めることができるようにするために、「身に付けさせたい『読む力』とその手だて」を基に、基本的な授業展開モデルの活用の仕方を工夫し、授業実践を行う。特に、3つの手だて①「考えをもたせる工夫」、②「考えを広げ・深めさせる工夫」、③「考えを広めさせる工夫」において、言語活動をさらに充実させながら、児童が主体的に読み、自分の考えを表現できるようにしていく必要がある。

(2) 視点2「学びを支える学習環境づくり」について

業前活動における伝え合い集会において、発信する内容を充実させたり、言語活動の表現様式を工夫したりしながらバリエーションを増やしていく。さらに、教室や廊下等の環境整備と活用について工夫し（写真20, 21, 22）、児童の学ぶ意欲を喚起できるようにしていく。また、家庭学習においては、取り組む内容に深まりが見られるように課題等の与え方を工夫していく必要がある。



<写真20 廊下の天井に掲示した「詩」>



<写真21 ホールの柱に掲示した「漢字の部首」>



<写真22 階段に掲示した「慣用句」>

仙台市立八乙女中学校

確かな学力を育成するための指導方法の工夫・改善 —基礎・基本と学習習慣の定着，学習意欲の向上を目指して—

1 学校の実態

児童生徒数 632人 職員数 51人 (平成22年2月12日現在)

	1年	2年	3年	特別支援	合計
児童数	188	207	232	5	632
学級数	6	6	6	3	21

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

① 今日の課題から

IT化の急速な進展によるグローバル化が進み、国際競争の激化など社会の在り方が、急激、かつ持続的に変化している現在、「これから社会に出て行く子供たちが身に付けるべき力」が、改めて問われており、生徒たちが将来、判断に迷う困難な状況においても自らの力で克服する力、つまり社会で自立できる「生きる力」を育成することが必要である。

このような中、我が国では、平成19年度に施行された改正学校教育法において、小学校、中学校等の教育にあたる上で、特に意を用いるべきものとして「基礎的な知識及び技能」、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」が掲げられた。そのためには、単にテストの点数を上げることをのみを目的とする近視眼的な施策ではなく、社会で生き抜く力、すなわち「基礎的な知識」はもちろんのこと、思考力、判断力、表現力等の「応用力」、主体的に学習に取り組む態度である「学習意欲」などを含む広い意味での学力＝「確かな学力」を育成するという観点に基づく施策を、幅広く実施していくことこそが肝要であると考えられる。

② 生徒の実態から

本校は仙台市の北に位置し、地下鉄沿線を学区とする学校である。保護者の教育への関心が高く、学校へも協力的であるが、家庭環境は様々であり、生徒の学習に対する意欲も千差万別である。

文部科学省の全国学力・学習状況調査や仙台市で実施している仙台市学力標準検査では、生徒の基礎学力の定着率はおおむね良好であることの結果を得ている一方、基礎的知識の習得が十分でない生徒が約2割ほど存在していること、宿題など指示された課題はこなすが、予習・復習等の自主的な学習には消極的な生徒が多いことが明らかになっている。また、少数ではあるが、勉強の意義を理解していない生徒も存在している。

教員を対象にした平成19年度のアンケート結果から、生徒の実態として、「学習習慣」「努力・向上心」「自分の考えや意見を伝える力」「基礎的・基本的な知識、技能」などが欠けているという意見が多く出された。その改善を目指し、生徒全員の学力の向上を本校の学校課題と捉えた。

③ 学校教育目標の具現化から

本校の学校教育目標は「心身ともに健康で、思いやりの心を持ち、社会の変化に主体的に対応し、力強く生き抜くことのできる生徒の育成」であり、「教師力」を強化し、「学校力」をつけ、生徒の「人間力」を豊かにすることを学校経営の方針としている。その中でも、学力の向

上は、本校における最重要課題であり、「基礎・基本の確実な定着を図り、活用力や探究力を育成させ、自ら学ぶ力を育てるために、少人数指導や指導体制等の方法や教育課程の工夫改善を行う。」ことを努力目標として掲げてきた。

また、仙台市教育委員会では、「確かな学力育成プラン」を策定し実践している。その中で、課題を思考し判断するために必要な基礎的・基本的な知識や技能を正しく身に付けさせることが必要であり、継続して学習することの大切さを自覚し、生徒自身が学ぼうとする意欲をもつことができる日々の授業の展開が大切であると提言している。そこで、課題を思考し判断するために必要な基礎的・基本的な知識や技能を正しく身に付けさせ、継続して学習することの大切さを自覚させ、生徒自身が学ぼうとする意欲を向上させることが大切である。また、基礎的・基本的な知識や技能を活用することによって、それが、より確実に習得できると考え、自分の考えや意見を自由に表現できる表現力の育成を各教科・領域・道徳の時間や総合的な学習の時間全てで育成する必要がある。

それを踏まえて、本校では、基礎的・基本的な知識の習得を図るための、①弾力的な教育課程の編成、②家庭と連携した家庭学習習慣の形成、③分かる授業を推進するための教師の授業力の向上、これら3つを柱として確かな学力の育成を目指し、本主題を設定した。

※ 参考資料 引文文献「確かな学力育成プラン」仙台市教育委員会



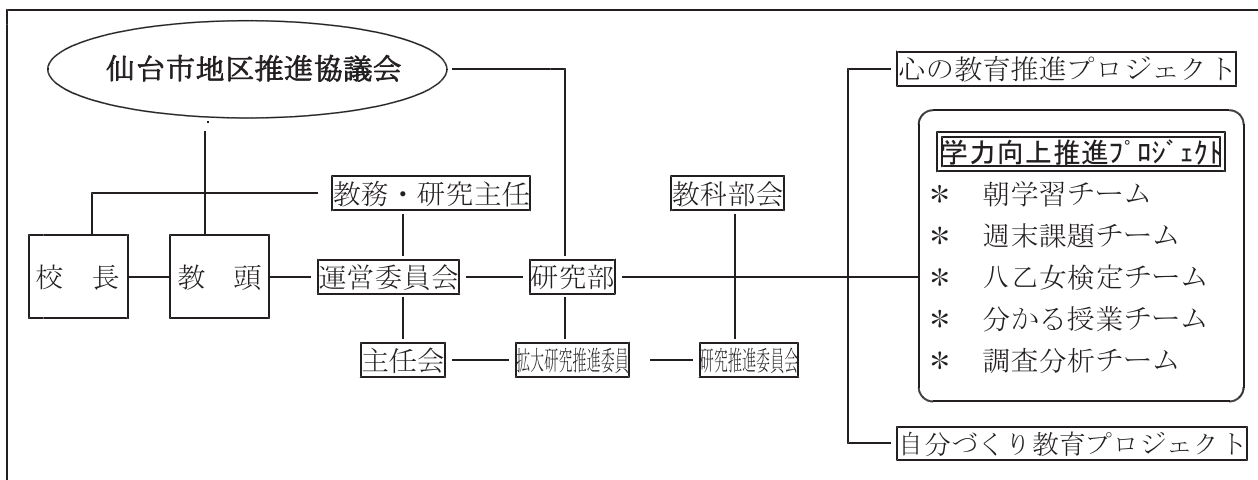
【 本校の確かな学力育成重点事項 】

(2) 研究目標

生徒一人一人に、基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせ、それらを活用して課題解決する思考力・判断力・表現力を育成するとともに、家庭と連携しながら学習習慣の定着を図り、学習意欲を向上させ、確かな学力を育成するための指導方法の在り方を探る。

(3) 研究組織

研究部、学力向上推進プロジェクト、拡大研究推進委員会が研究の全体計画の立案に当たる。拡大研究推進委員会は、毎月開催し、各プロジェクトからの実践報告や今後の計画などについて共通理解を図り、各教科部会や学年部会で実践研究を実施し、学力向上推進プロジェクトで調査活動や検証を実施している。



<研究計画・経過>

平成20年度の年間計画と経過

4月	☆CRT検査, 仙台市標準学力検査, 全国学力・学習状況調査の実施 ☆校内研修・研究計画の共通理解
5月	☆拡大研究推進委員会 (☆全体計画, 年間予定, 組織) ☆本校における教育課題の整理及び検討 ☆朝学習における八乙女検定方式の手引き, ☆週末課題の共通理解 ☆少人数指導・TT指導計画立案 (具体的方策)
6月	☆学力向上校内研修, 仙台市学力向上担当者会
7月	☆CRT検査結果分析 ☆長期休業における補充授業
8月	☆仙台市標準学力検査結果分析 ☆長期休業における補充授業 ☆朝学習・週末課題における課題検討会と評価方法の検討 要請訪問事前打ち合わせ (研究主任対応)
9月	要請訪問指導案提出 (9/1) 第1回要請訪問指導案検討会 (9/11 15:15~17:00)
10月	要請訪問改訂指導案提出 (10/6) 第2回要請訪問 (授業研究会Ⅰ 10/17 数学, 社会, 技家, 英語) 第3回要請訪問 (授業研究会Ⅱ 10/21 国語, 理科, 音楽, 保体, 特別支援)
11月	☆少人数指導, TT指導における課題・問題点の集約 ☆全国学力・学習状況調査の分析
12月	☆CRT検査, 仙台市標準学力検査, 全国学力・学習状況調査の結果 ☆分析の総括, 本年度のまとめ
1月	☆文部科学省指定研究校 中間発表会
2・3月	先進校視察 (栃木, 東京, 横浜) 本年度の反省と平成21年度計画作成

平成21年度の年間計画と経過 (☆は前年度同様に実施したため省略)

4月	2年次の学力向上校内研修・研究計画の共通理解 朝学習, 週末課題, 八乙女検定の実施変更の共通理解
5月	指導案検討会 (英語) 5/28
6月	指導案検討会 (数学, 学活, 理科) 6/1 指導案検討会 (理科) 6/4 授業研究 (数学, 学活, 理科) 6/24
7月	指導案検討会 (保体, 家庭, 学活) 7/16 指導案検討会 (国語, 音楽) 7/22 学力向上校内研修会7/23
8月	指導案検討会8/18 指導案検討会 (美術, 社会) 8/19 授業研究 (美術, 社会) 8/27
9月	授業研究 (学活) 9/1 授業研究 (学活, 保体, 国語, 家庭, 音楽) 9/8
10月	指導案検討会 (学活) 10/1 指導案検討会 (社会, 国語) 10/2 指導案検討会 (英語, 社会, 国語) 10/5・8・9 視察 (宮古市立河南中) 希望コース制少人数指導実施
11月	授業研究11/26
12月	仙台市自主公開授業 (社会, 英語, 国語, 学活, 道徳) 12/7
1~3月	☆文部科学省指定研究校 中間発表会, 本年度の反省と平成22年度計画作成

平成22年度の年間計画

- ・3年次の学力向上校内研修・研究計画の共通理解
- ・家庭との連携施策計画立案・共通理解
- ・指導案検討会と授業研究計画提示
- ・授業研究の実施
- ・家庭との連携プロジェクトの改善・検証
- ・実践の検証，記録の集積
- ・研究成果のまとめ作成

(4) 研究仮説

分かる授業づくりと授業改善を推進し，基礎・基本の定着と学習習慣の形成を図る活動を実践すれば，学習意欲が向上し，確かな学力を育成することができるだろう。

(5) 研究内容

生徒一人一人に基礎的・基本的な知識や技能を習得させるための指導の在り方を全職員で組織的に実践し検証する。

① 教員の教科指導力の向上

- ア 分かる授業づくりを目指した授業改善の推進
 - ・授業実践力（ねらいにせまる指導過程，発問構成，支援の在り方）の向上
 - ・研究授業の在り方の工夫（指導案検討会，プレ授業，研究授業，授業検討会）
 - ・道徳の授業づくりを通し習得した指導方法の活用
- イ 大学の講師を招聘し，教材分析や授業づくり等テーマを絞っての校内研修の実施
- ウ 各教科における習得すべき基礎的・基本的な知識・技能を明確にしたシラバスの作成

② 生徒の学習意欲を高める実践

- ア 習得した知識や技能を活用できる場を授業の中に位置付け，自分の考えや疑問を共有し合える学習形態の工夫
 - ・話し合い活動を意図的に取り入れた指導過程の工夫
 - ・発表力を向上させるための段階的な指導方法
 - ・一人一人に自己肯定感を味わわせる指導の在り方
- イ 学習スタイルの選択ができる希望コース別学習（少人数指導やTT指導）の工夫
 - ・少人数を生かした支援の在り方
 - ・複数教師による効果的授業実践
 - ・生徒の実態に応じた選択制
 - ・基礎・基本，表現力・活用力の育成を図る学習形態の工夫
 - ・個別支援の工夫
- ウ 教科指導と密接に関連させた朝学習における自作プリントの作成とその活用
 - ・補充，発展問題を併用した内容の工夫
 - ・朝学習時間内における知識・技能の習得方法の工夫

③ 生徒の学習習慣の形成

- ア 朝の短時間による基礎学習の定着と週末課題・八乙女検定との有機的で効果的な校内システムの確立
- イ 教科・選択学習における短時間を単位とした弾力的な教育課程の編成（朝学習の教育課程の位置付け）
- ウ 「生活のあゆみ」の活用による家庭と連携した学習習慣の定着

(6) 研究の方法

① 教員の教科指導力の向上

- ア 仙台市教育委員会と連携しながら、教員の教科指導力の向上のため、全教科で授業研究を実施する。単に研究授業だけを参観せず、事前に指導案検討会から指導主事と共に授業づくりを行う。そこでは、授業の目標やねらいを実現させるために、生徒の実態を踏まえ、指導の手立てを話し合いながら、授業参観の視点を明確にし、研究授業で検証する。
- イ 授業参観の共通視点を設定し、観点を絞って参観する。参観した教師全員が「授業参観カード」に記入し、また、授業記録を速記と映像として残す。それらをもとに授業検討会で検討する。その後、「参観カード」の内容を集積し、記録として蓄積し、改善点を明確にする。
- ウ 全国学力・学習状況調査、仙台市標準学力検査、教研式標準学力検査（CRT検査）、SET検査等による調査研究を実施し、全国、県、市の平均正答率との差の比較や同学年比較、経年比較のデータを分析し、課題改善のための指導法の工夫を図る。
- エ 年2回の学校評価や諸検査による形成的評価の変容の把握と客観的に検証できる資料を作成する。
- オ 大学や教育委員会から講師を招聘し、具体的な授業づくりの方策などを実施する。また、先進校での研究や視察研修を参考にしながら、教職員間で共有し、これからの研究の在り方を検証する。

② 生徒の学習意欲を高める工夫

- ア 習得した知識や技能を活用できる指導過程を授業の中に位置付け、生徒の考えや疑問を表現させるためのプレ授業の実践とその検証
- イ 学習スタイルの選択ができる希望コース別学習が、生徒の学習意欲を高め、学力向上を推進しているかどうかを検証する。
- ウ 教科指導と密接に関連させた朝学習における自作プリントの作成、並びに活用状況の記録の蓄積とその改良と分析を行う。

③ 生徒の学習習慣の形成

- ア 家庭学習習慣を形成するための週末課題と振り返りテストの実施状況の推移と学校評価による生徒の意識調査を実施する。
- イ 教科・選択学習における短時間を単位とした弾力的な教育課程の編成により、生徒の学校生活リズムの形成と授業時数の確保の観点から検討する。
- ウ 家庭と連携した学習連絡帳（「生活のあゆみ」）の活用による家庭学習習慣を身に付けさせる。

(7) 実践事例

① 教員の教科指導力の向上

実践事例 1

～ 調査研究 ～

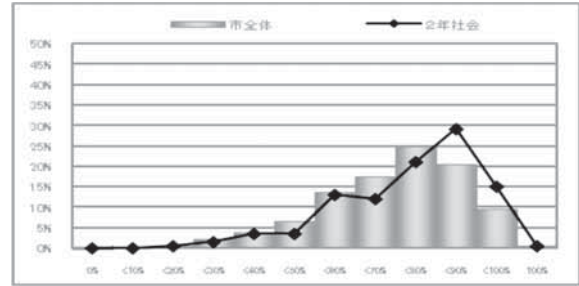
- 4月・・・教研式標準学力CRT検査
仙台市標準学力検査
全国・学力学習状況調査(3年のみ)
- 5, 6月・・・教研式標準学力CRT検査
仙台市標準学力検査のデータ分析
(同年比較, 経年比較, 度数分布表)

『基礎力, 応用力比較』



【 教研式標準学力CRT検査の観点別評価ABCの経年比較グラフ分析】

- 7月・・・SET検査の実施
第1回学校評価の実施
- 8月・・・SET検査と学校評価のデータの分析
- 9月・・・全国学力・学習状況調査の結果データの分析
- 10月・・・SET検査と学校評価と全国学力・学習状況調査の分析結果の考察と対策
- 12月・・・第2回学校評価のデータ分析



【仙台市標準学力検査の各教科度数分布】

領域、小領域、観点別、基礎力、応用力などの考察と次年度への課題の追究。学力向上プロジェクトでデータをまとめ、職員に提示。各教科部会で「結果の分析」「成果と課題」「これまで効果的だった取組」「見直しが必要な取組」「今後の具体的な取組」等の観点で分析し、授業改善対策を検討する。その後、拡大研究推進委員会で共通理解する。

実践事例2

～ 全教科、領域での取り組み（分かる授業づくりを目指した授業改善の推進）～

昨年度も各教科での授業研究を実施し、教育センターや大学と連携しながら進め、その教科における授業改善等を明確にし日々の授業に反映させてきたが、学校体制としての取り組みが少なかったため、本年度は、道徳や学活を含め、以下の点を全ての授業で全職員が共通理解して取り組むことにした。

ア 生徒の話し合いにおける留意点

「聞く」

- ・キーワードを押さえさせ、それに対する自分の考えをもつように日頃から生徒に啓発。

「話す」

- ・発表、発言する内容を考える時間を設け、場合によっては記載させて自分の考えをまとめさせる。

「指名」

- ・発言を求めるときや発問をする際には、教師は必ず予想される生徒の反応を押さえておく。
- ・指名は意図的指名を原則とする。挙手であっても授業の組み立てを考慮して指名する。

イ グループ学習における留意点

- ・グループ学習の意図を明確にして行わせる。単に集まれば良いのではない。
- ・座席の配慮を考えた上でのグループ編制を行う。
- ・事前に明確な指示を出す。

（何のことに、何分間、どんな形態で、誰が進行するのか。）

- ・一人一人が必ず自分の意見を述べるのが約束事項。教師は机間支援しながら励ます。

アとイに関しては、道徳や学級活動を含めた全授業で実施するように提案し、実践する。



実践事例3

～話し合い活動におけるルール～

6月24日(水) 第2回校内授業研究会

学活研究授業(1年)

題材名「なぜ、今学ぶのだろう」

【授業のねらい】

- 学ぶことについて多くの意見から自分の考えをまとめ、将来に向けて学び続けようとする態度を育てる。

『授業改善の視点』



- * キーワードを押さえた意見交換のさせ方。
- * ペア学習の進め方と留意点
- * 他者の発表を聞いて、自分で考えを発表させる指導のあり方

② 生徒の学習意欲を高める実践事例

実践事例 1

～個に応じた支援を大切に、集団の特性を生かした少人数指導～

6月24日(水) 第2回校内授業研究会

数学研究授業(2年)

単元名「連立方程式」

【授業のねらい】

○ 式の係数に応じて、効率的な消去の方法を考えさせ判断させる。

『授業改善の視点』

- * グループ学習における話し合い活動の進め方と話し合いの収束の方法。
- * 意図的指名における発表でのルールと判断思考過程の説明の初期段階の指導。
- * 少人数指導における個に応じた机間支援と少人数を生かした指導。



実践事例 2

～少人数指導とティームティーチング指導の良さを効果的に組み合わせた指導～

12月7日(月) 公開研究会

英語研究授業(2年)

題材名「身近なことを英語で表してみよう～動名詞を使って～

Unit6 The Story of Silent Night (New Horizon English Course2)」

【授業のねらい】

○ 主語としての動名詞を理解して、身近な内容について表現し、仲間と協力してグループ活動に取り組むことによって、互いの個性や長所を尊重し、協力して一つのものを創り上げる。

『授業の改善点』

- * 3人の教師が、教室を列ごとに大きく3グループに分け、1クラスの中で少人数指導を展開する。
- * 導入や、展開時のモデル対話を複数の教師でおこなうことによるメリット。
- * さらに少人数グループを編成し、3人の教師によるよりきめ細かな指導。
- * 上記のTTと少人数指導を効果的に組み合わせることによる分かる授業づくり。

実践事例 3

～互いの学び合いに、『発見ポイント』を取り入れた相互支援活動～

9月8日(火) 第6回校内授業研究会

保健体育研究授業(1年)

単元名「器械運動『マット運動』」

【授業のねらい】

○ 『発見ポイント』を見つけて互いに学び合い、「頭倒立」から「倒立」ができるようにする。

『授業改善の視点』

- * 『発見ポイント』による学び合いの場の設定。
- * 個人学習カードによる自己評価とその支援。
- * 小学校での学習内容との関連を図りながら、中1ギャップの解消を目指した取組



実践事例 4

～職場体験活動を振り返り、グループ活動を通して相互に学び合い、自己の生活に活かす～
12月7日（月） 公開研究会

学活研究授業（2年）

題材名「働く上で身に付けたい力を考えよう」

【授業のねらい】

○職場体験活動の振り返りから働く意義についての考えを深め、将来を見据えて、今自分が何をすべきかを考える。

『授業の改善点』

- * ワークシートの効果的活用。
- * 個人の考えの引き出し方の工夫。
- * グループ活動における相互意見交換の仕方の工夫。



③ 生徒の学習習慣の形成を目指した実践事例

実践事例 1

～基礎的・基本的な知識・技能を定着させるとともに家庭学習習慣を定着させるための朝学習・週末課題・八乙女検定～

ア 朝学習

朝の8時25分から15分間、国語・社会・数学・理科・英語の教科に関する基礎的・基本的な学習内容の定着を図るために、学習プリントを作成し全教員が交替で机間支援しながらプリント学習を実施。学校全体で学習する教科の予定を決め、1教科について原則として5コマ連続して実施。



イ 週末課題

毎週金曜日に、朝学習の実施教科の教科担任が週末課題を作成し、課題と解答を生徒全員に配布。翌週の月曜日の朝に各担任に渡す。各担任は提出状況をチェックし、教科担任に提出。教科担任は、理解状況を把握した後、本人に返却。

ウ 八乙女検定の評価と手だて

毎週月曜日の朝に前の週の朝学習・週末課題の教科の検定を実施。相対評価で基準を決めるのではなく、問題を作成する段階で基準を決めておき、大まかな目安として約60%以上の解答率を合格とする。学年で分担しながら教員が採点し、その後、教科担任がテストを確認し、担任を通して本人に返却。

定着していない生徒には再テストを実施。それでも合格できない生徒には、個に応じた指導で、その生徒に合った課題を与える（具体的には、レポートやノートに反復練習させるなどの課題を与え、教科担任に提出させる）。

エ 生徒への説明

4月に「朝学習（週末課題）と八乙女検定」のオリエンテーションを開き、生徒に対して説明を行った。

3 研究成果

(1) 学力向上各種検査結果について

① 仙台市標準学力検査結果より

〈仙台市標準学力検査における正答率経年比較〉 ～現2年生～

年度	八乙女-仙台市	国語	社会	数学	理科	英語
H21年	2年次	1.7	4.0	4.3	6.4	0.4
H20年	1年次	1.0	2.4	2.4	3.2	*

〈仙台市標準学力検査における正答率経年比較〉 ～現3年生～

年度	八乙女-仙台市	国語	社会	数学	理科	英語
H21年	3年次	0.8	1.5	5.5	2.8	3.1
H20年	2年次	1.7	5.7	2.4	6.4	0.4

仙台市標準学力検査の結果から、本校と仙台市の平均との差を比べると、少人数指導やT T指導を実施している数学科と英語科は、昨年度以上に正答率が仙台市平均よりも上回っている。

〈仙台市標準学力検査における基礎力・応用力〉

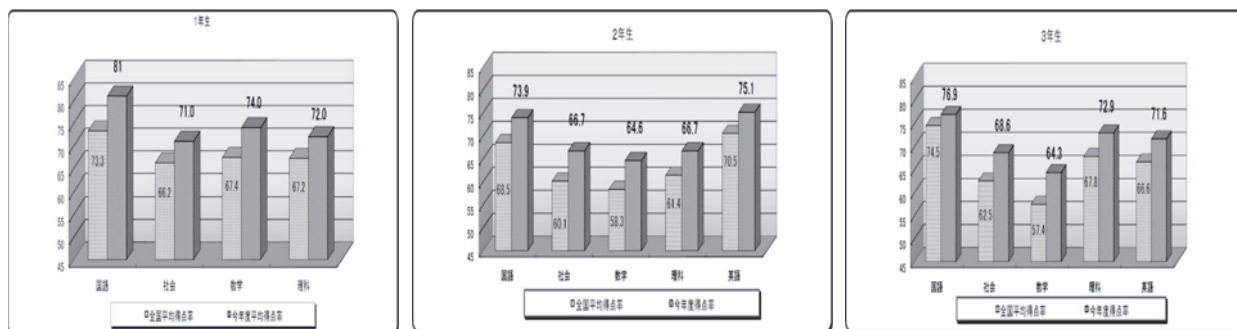
学年	八乙女-仙台市	国語	社会	数学	理科	英語
2年	基礎力	1.6	3.3	4.2	2.1	1.3
	応用力	1.9	7.6	4.9	2.9	-0.2

学年	八乙女-仙台市	国語	社会	数学	理科	英語
3年	基礎力	0.9	1.5	5.3	2.4	2.9
	応用力	0.2	1.7	6.9	4.6	3.7

基礎力・応用力の本校と仙台市との差の比較においては、2年の英語科と3年の国語科を除いて、他の全ての教科で、基礎力の差よりも応用力の差が大きく、応用力が身に付いていることがうかがえる。

② 教研式標準学力検査CRT検査結果より

基礎的・基本的な内容の理解度の調査を目的としている教研式標準学力検査（CRT検査）においては、全学年の5教科のほとんどの平均得点率は、全国平均得点率を5ポイント以上、上回っており、基礎・基本の定着は十分になされてきているので、思考力・判断力・表現力の育成と実践場面で活用する力や探究する力が今後求められる。



【図1 教研式CRT検査の本校の教科平均と全国平均と比較（学年ごと）】

③ 全国学力・学習状況調査の結果より

平均正答率		A問題（主に知識）			B問題（主に活用）		
教科	年度	全国	仙台市	八乙女中	全国	仙台市	八乙女中
国語	平成21年度	77.0	80.0	80.1	74.5	78.1	79.7
	平成20年度	73.6	76.5	77.0	60.8	66.1	69.2
数学	平成21年度	62.7	66.3	70.0	56.9	62.3	66.8
	平成20年度	63.1	66.7	70.8	49.2	54.0	57.8

国語A、国語B、数学A、数学Bの問題に対する正答率は、全国を上回っているが、国語Aに関しては、設問別調査結果を分析すると、「文脈に即して漢字を正しく読む」「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」趣旨の問題を苦手としている。

(2) 教員の教科指導力の向上について

仙台市教育委員会と連携しながら、全教科、学級指導15回の授業研究会を実施した。その成果として以下の点が挙げられた。

- ・ 大学准教授や指導主事から指導案の作成及び検討会の内容が充実し、向上したとの評価を受けた。
- ・ 課題の提示の仕方やグループ学習での留意点など、教科を超えた意見が多く出されるようになった。
- ・ 普段でも互いに授業を見合い、意見交換をする場面が教師間で増えた。

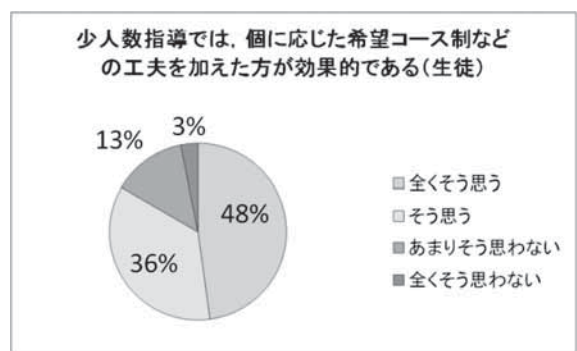
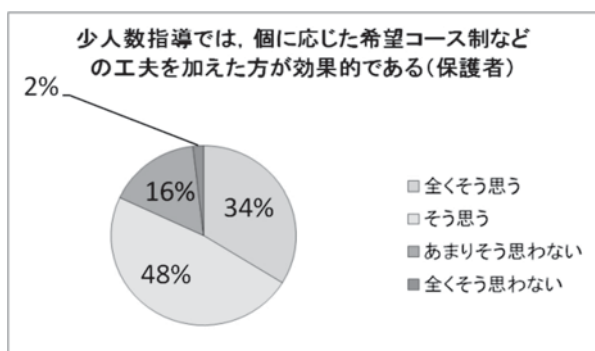
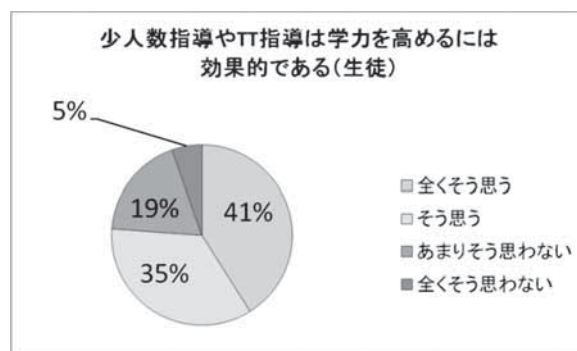
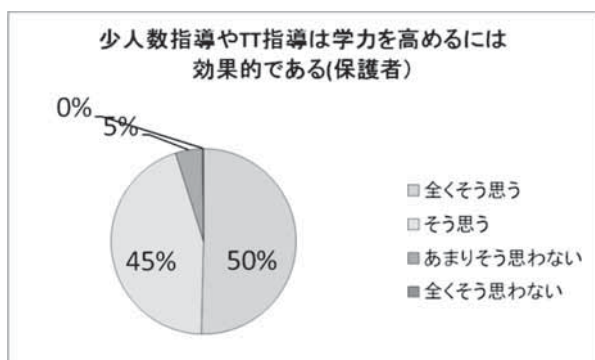
- ・「授業参観カード」や授業記録を基にした焦点化された効果的な授業検討会が実施された。
- ・校内研修や研究授業を通して、全職員が日々の授業改善に取り組み、分かる授業づくりを目指して意欲的に行うようになった。
- ・教科部会や各学年において、研究授業における「指導案の検討→プレ授業→指導案の再検討→研究授業→授業改善の実践」という流れが定着している。
- ・全国学力・学習状況調査、仙台市標準学力検査、教研式標準学力検査（CRT検査）の分析を基に学習評価の在り方と授業改善が機能的に改善されるようになり、これらの検査を指標とするPDCAサイクルが確立しつつある。

(3) 生徒の学習意欲を高める工夫

本年度7月に生徒・保護者にアンケートを実施し、2学期に希望コース別の少人数指導を全学年の英語科と数学科で実施した。

～ 保護者回答 ～

～ 生徒回答 ～

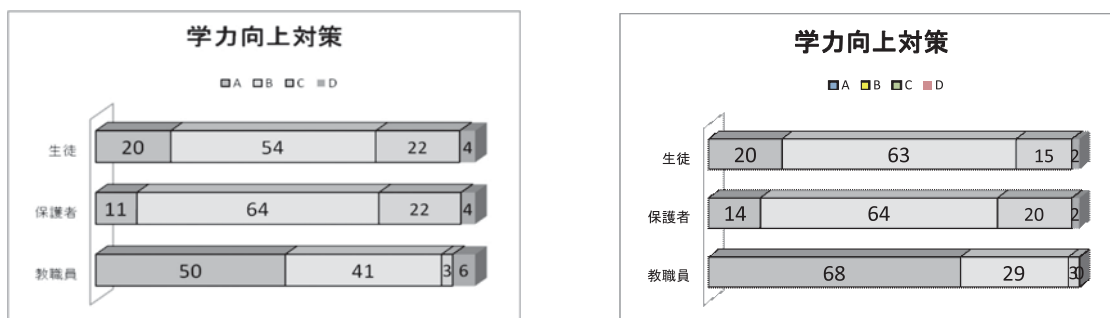


『 グラフ2 少人数指導に対する保護者・生徒の意識調査 』

【 平成20年度学校評価 回答・・・生徒614名、保護者360名 】

- ① 学習スタイルの選択ができる希望コース別学習が、生徒の学力を高めるためには効果的であるという意識調査の結果が出た。このことから生徒の実態に応じた希望コース別学習は、生徒の学習意欲を向上させると考えられる。
- ② 希望コース別学習の各種の事前調査や意識調査など、前段階での検討を十分行った上で、生徒・保護者へ提示したため、生徒のコース選択がスムーズにいき、意欲的に学習に取り組んでいる。
- ③ 教科指導と密接に関連させた朝学習の自作プリントの作成により、基礎的・基本的な知識、技能の習得が朝学習で行われるため、授業で活用にかかる時間が増え、意欲的に取り組む生徒の姿が多く見られるようになった。
- ④ 日々の教科指導の内容に関連したタイムリーな自作プリントのため、朝学習の効果を認識して意欲的に取り組む生徒が増えている。

『 グラフ3 授業で教師は、生徒の学力を高めるための工夫をしているか』

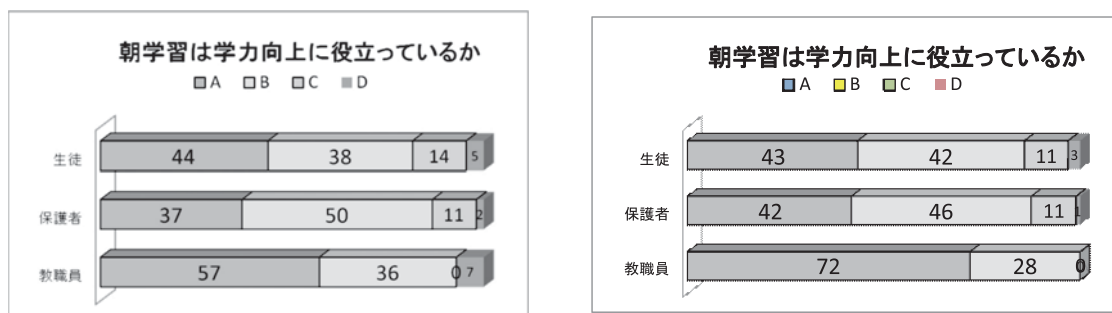


【平成21年度学校評価 回答 教師36名 生徒619名・614名 保護者518名・458名, 数値は% 左7月 右12月】
 A: そう思う B: どちらかというと思う C: どちらかというと思わない D: そう思わない

(4) 生徒の学習習慣の形成

- ① 8時25分に着席し、朝学習係の生徒がプリントを配布し、静かに学習に取り組む習慣が定着している。
- ② 週末課題に対する保護者の理解も得られ、昨年度以上に提出状況は向上していることから、家庭での学習習慣の形成にも役立っていると思われる。
- ③ 八乙女検定に向けて、朝学習や週末課題への取り組みが向上してきている。
- ④ 弾力的な教育課程の編成により、朝学習・週末課題・八乙女検定のシステムがスムーズに効率的・効果的に実践されるようになり、生徒一人一人への支援の機会が増え、生徒への励ましや意欲付けを行うことができるようになった。

『 グラフ4 朝学習は学力向上に役立っているか 』



【平成21年度学校評価 回答 教師36名 生徒619名・614名 保護者518名・458名, 数値は% 左7月 右12月】
 A: そう思う B: どちらかというと思う C: どちらかというと思わない D: そう思わない

4 今後の課題と改善策

(1) 各種検査結果について

- ① 生徒個々の分析結果を具体的な学習の場面でどのように改善するかを家庭と連携しながら進める必要がある。また、各種調査や検査の特性等について、再度校内研修を実施し、その活用方法を全職員で共通理解する必要がある。
- ② 分析結果から、改善策や改善プランを作成し、解決状況について検証しているが、日々の授業への反映の仕方について職員の共通理解が十分に進んでいない。

(2) 教員の教科指導力の向上について

仙台市教育委員会や宮城教育大学と連携した授業研究・校内研修を実施する上で、今年度は、昨年度と半数近くの教職員の異動があったため、これまで研修した内容を再度実施する必要が出た。

授業のねらいに沿った内容であったかどうか、ねらいを達成するために効果的であったかどうかなど、単なる工夫ではなく授業のねらいに対してどうであったかの検証をさらに明確にでき

る授業検討会の在り方を今後も追究する必要がある。また、基礎的・基本的な知識、技能を明確にするためシラバスを作成したが、授業を進めていく中でシラバスの訂正や改善など、活用が不十分な教科もあった。

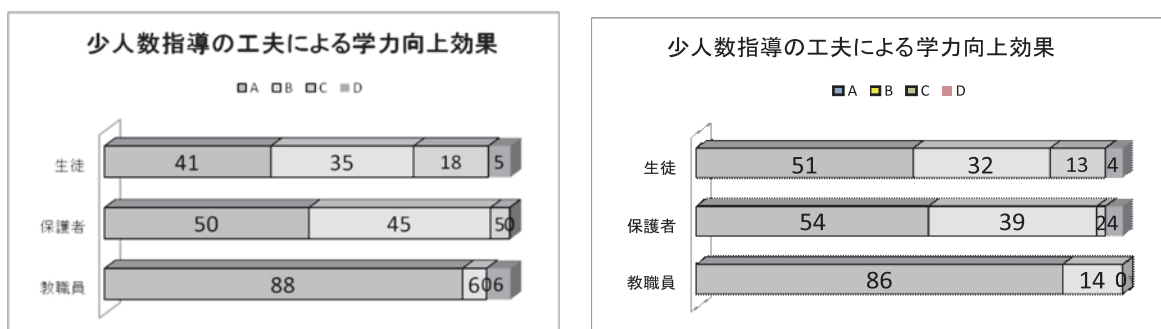
(3) 生徒の学習意欲を高める工夫

～希望コース別学習の工夫・改善～

少人数による希望コース別学習を望んでいる生徒・保護者がほとんどであるが、一部の保護者で学習活動や評価に関する疑問も見られた。また、コース別学習の進捗について、より一層の教科内での話し合いや指導計画の見直し・改善が必要である。

また、年間を通しての固定化した形態の指導は効果的とは思われず、単元や授業内容に応じて最も適する形態の工夫を考えながら計画作成する必要がある。

『グラフ5 少人数指導は、学力を高めるには効果的であるか』



【平成21年度学校評価 回答 教師36名 生徒619名・614名 保護者518名・458名、数値は% 左7月 右12月】

A: そう思う B: どちらかというと思う C: どちらかというと思わない D: そう思わない

～朝学習・週末課題・八乙女検定～

朝学習・週末課題・八乙女検定は全てが自作プリントであり、教科のローテーションによって、2週間から5週間に一度の自作プリントの作成であるため、作成時間の確保や内容の吟味や工夫が必要である。

また、朝学習プリント内容で、生徒自身が理解することが難しいと判断すると、学習意欲が低下し、取り組みがおろそかになる傾向があり、教師が支援しても15分間という短い時間では、対応する生徒に限りがある。その反省を踏まえ、社会科や国語科において、時々、模範解答を最初に渡し、最初の5分間に暗記させ、それを残りの10分間で確認するなどの工夫した学習のさせ方も実施している。



(4) 生徒の学習習慣の形成

① 週末課題については、未提出の生徒が固定化しつつある。特に、学習意欲の低い生徒は提出状況も悪く、家庭との連携がとりにくいため、個別面談や教育相談において保護者との連携を図っているが、その具体的な方策を検討していくことが今後の課題である。教科担任と学級担任や学年主任が連携しながら個々の生徒を励まし、意欲をもって家庭学習に取り組むように保護者への啓発を一層促す必要がある。

② グラフ3、4の結果等から、教師は、学力向上を目指した授業改善や朝学習、学習習慣の定着を目指した週末課題・八乙女検定に対して意欲的に実践し、成果が上がっていると考えているが、生徒・保護者の評価はあまり変化していない。学び直しのできる学習環境の整備として放課後や長期休業日の学力補充日の設定に取り組んでいきたい。学校評価の結果を踏まえて、家庭学習習慣の形成として、家庭と学校が連携しながら、連絡を密にとるとともに、親も子供の学習習慣に関心をもつ必要がある。そのために現在「学習のあゆみ」（学習内容の連絡や学校生活、家庭生活の記録など）の検討を行い、活用する予定である。

学力向上実践研究推進事業
平成21年度報告書

発行月 平成22年3月
編集発行 宮城県教育庁義務教育課
住 所 仙台市青葉区本町3-8-1
電話 022-211-3644

